

516
275

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5

始



太陽の子

イキリー
米正川
吉豊泰

1924

東京

閣大英家

13 11 15

内交

ゴトリキイの創作に於ける

「太陽の子」の位置

ゴトリキイの文學的活動は概活的に見て三つの時代に分ける事が出来る。第一期は主として放浪者や下級労働者——所謂『跣足人足』を主人公とした多くの短篇や、長篇『三人』などに代表されるもので、ゴトリキイはその中で現存社會制度の不正、不備、愚劣に對する個性の反抗を高調した。彼は褻褻と、汚穢と、無智と、罪惡に充された彼等の生活の中に、權力にも金錢にも屈せぬ氣概と誇りを持った、奔放不羈な大膽な簡性や、飽食暖衣の階級に到底見る事の出来ない、人情味に充ちた淳朴な性格を發見したので

ある。併しこれらの自由な自然児の叫びが如何に雄々しく美しく響かうとも、それは結局訓練と自覺に缺けた漠然たる反抗の叫び聲であつて、この不合理な社會組織を改造して、簡性をその桎梏から救ひ出すやうな力を有つてゐなかつた。一九〇二年公けにされた有名な戯曲『どん底』は、社會の最下層に住む不幸な人々が、どんなにその恐しい牢獄から脱け出ようとしても、冷い鐵鎖は固く彼等の手足に食ひ込んで、永久に放さうとしないと云ふ、ペンシステイックな氣分の漲つたもので、ゴリキイの放浪者に對するやゝ理想家的態度に、ある變化の生じた事を物語つてゐる。

人生改造の力を『跣足の放浪者』の間に求めて満足を與へられなかつたゴリキイは、今度視線を知識階級の上へ轉じた。これが彼の創作活動の第二期を形作るもので、『町人』『別荘の人々』、『太陽の子』、『野蠻人』な

どの戯曲を抱合してゐる。けれども彼は手痛い失望を嘗めさせられ後、遂にプロレタリアの階級に眞の人生の建設者を獲得する事となつた。これが第三期と稱すべきもので、戯曲『敵』がその分界線に立ち、長篇『母』『懺悔』などがそれに續いてゐる。

幼時から不幸な孤兒としてつぶさに無産者放浪者の苦艱を味つたゴリキイが、己れと同じ境遇にある不幸な人々に同情を寄せ、愛着を感じる事が深ければ深いだけ、生活を保障された階級の一部としての知識階級に、反感憎惡を抱くやうになつたのは極めて自然の數である。この反感は早くから彼の作品に影を現してゐたが、前に述べた時期——凡そ一九〇一年から六年頃まで——に於ては、それが彼の文學的活動の基調となつて、ブルジュア的インテリゲンチヤの容赦なき批判が、この時期に書かれた全作品の主

題となつてゐる。「太陽の子」はその好箇の代表作と見做すべきもので、教養階級のみじめさ無氣力さが、あらゆる形に於て讀者の前に展開してゐる。主人公のプロタソフは自分の研究する化學の力を絶対に信じ切つてゐるナイーヴな空想家である。彼は深い宇宙の秘密を暴いて行つてやがては死の恐怖をも征服して見せると傲語して、自らを太陽の子と稱し、未來の人類に明るい生の力を與へる事を自負してゐながら、己れの周圍に生活してゐる貧しい勞働者や不幸な敗殘者などは、眞の美しい人間——インテリゲンチヤを載せて光明と眞理を指して走る、船の底にこびり付いてその船脚を妨げる、船殻や藻屑に過ぎないと考へてゐる。又畫家のブーキンは自分達を黒雲の中に閃く火花に譬へ、その餘の人々を盲目な土龍と呼んでゐる。彼等はいかうした過大な自負心を有してはゐるが、しかしそれに相應

はしい高潔なプライドも、男性的な力強い感激もなく、小さな欲望や、小さな利己心や、嫉妬などに動かされながら、誰にも用のないやうな、退屈で凡俗な生活を送つてゐる。かうした人々の中で一番善良で眞摯な性格の所有者たるプロタソフの妹リーザも、徒らに人間苦に胸を痛めて、人生を充してゐる憎悪に恐れ慄へるのみで、結局病的に無氣力な智識階級の一つの型を現してゐるに過ぎない。

この戯曲は一九〇七年モスクワ藝術座に上演されたが、その成功は曩に同じ劇場の舞台に上された『どん底』と比較すれば、特に言ふべきものもなかつたやうである。それに全體としてある批評家が『ゴリキイは謬つて始めに傑作を書いて了つた』と云つてゐるやうに、『どん底』とその以後の彼の戯曲の間には、藝術的品格に於て非常な徑庭が存してゐる。『どん底』

は此の作者の愛する故郷とも云ふべき世界で、そこに異常な力と感激が籠
つてゐるけれど、『太陽の子』その他の戯曲は否定の上に築かれた作品であ
る上に、作劇上チエホフの影響を受けて、平板で無意味な生活をその儘ス
ケッチ風に見さうとしたために、讀者に肉薄する力が幾分弱められてゐる
やうに感じられる。とは云へ、ゴリキイの藝術的成長の一時期を代表す
る作品として、この『太陽の子』が深い興味をもつて讀まるべきものであ
る事は言ふまでもない。

今舞台藝術に深い理解と知識を有する秦君がこの戯曲を譯出されたの
は、我邦のゴリキイ研究者に取つて、一つの貴重な材料を増したものと
して、大きな悦びであらねばならぬ。

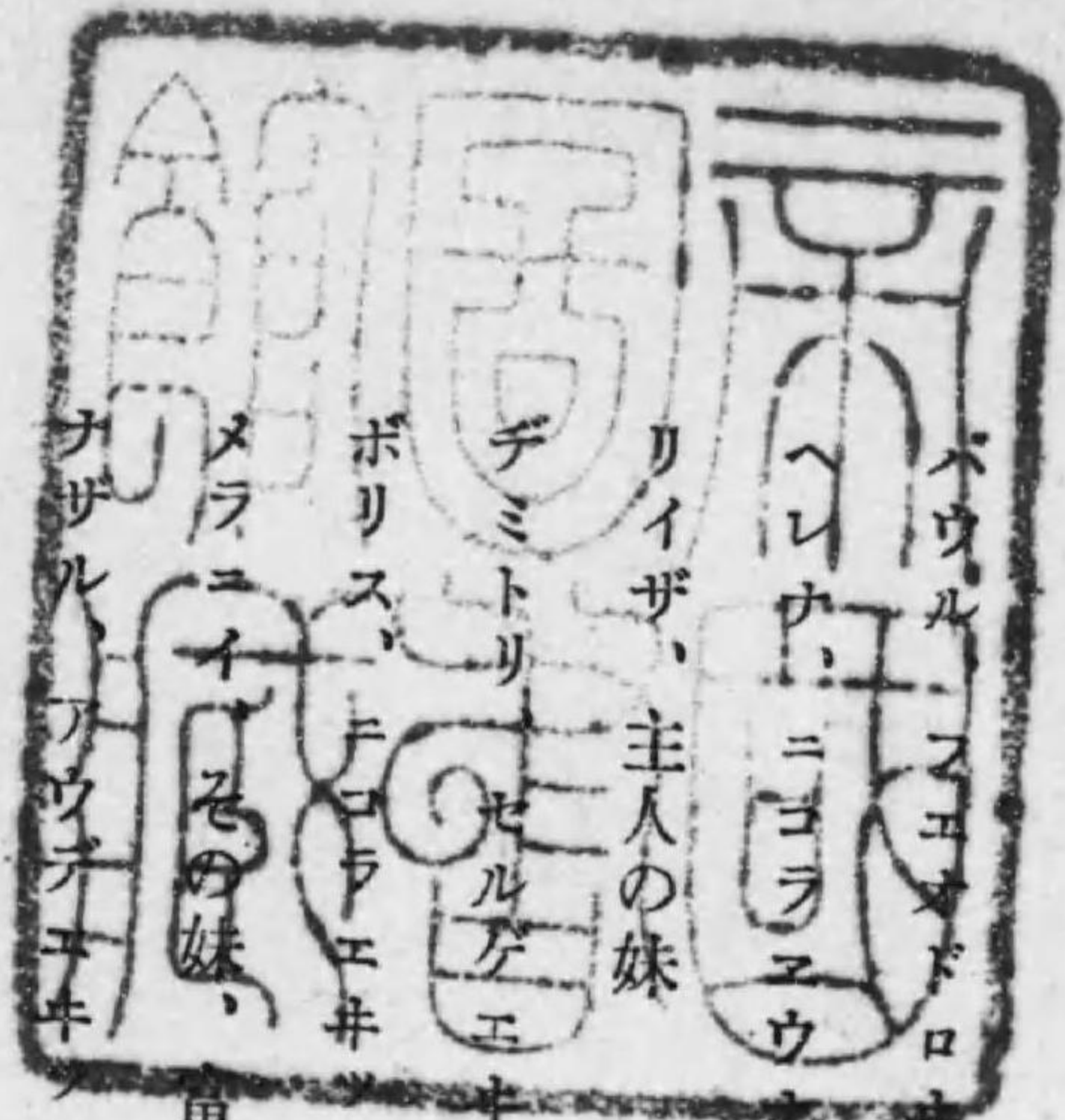
一九二四年四月三十日

米川正夫

太陽の子

マキシム・ゴリキイ作
秦 豊 吉 譯

人



ヘレカ、ニゴラエウ、夫人
リイザ、主人の妹
デミトリ、セルゲエキ、ツチ、ワギン、書家

ボリス、テロラエキ、チ、チェプルノイ、獣醫
メラエイ、その妹、富豪の寡婦

ナサル、アウテエキ、チ、家主

ミシヤ、その息子

エゴル、錠前屋

アウドチャ、錠前屋の妻

ヤコブ、トロシン、酔ひどれ

アントノウナ、主人と妹との昔の乳母

ピマ、下女の二

ルシヤ、下女の二

ロマン、門番

醫師

序 幕

いかめしい古い家、薄暗い広い部屋、左の壁に窓と扉あり。その扉からテラスに出られる。部屋の左側の一隅から主人の妹の住む二階に

通ずる階梯あり。正面に戸口を通じて食堂を見る。部屋の右隅には主人の部屋に通ずる扉あり。書棚、古めかしく重々しい家具、テーブルの上には高價なる装幀の書物載せてある。或書棚の上には白い半身像。左手窓際に大きな圓いテーブル、その前に主人が腰かけてゐて、假綴の本を翻し、その傍にある小さなアルコールランプを注視する。ランプで何か煮てゐるのである。テラスの上、窓の下には門番が陰鬱な單調な歌を唄ひ乍ら働いてゐる。主人はこの唄をうるさく思つて、

主人。おい、おい、門番。

門番。(窓から中へ)くち。

主人。どうだね一つ、外でもぶらついてきちやあ。よからうて。

門番。どちらへでございます。

主人。どこと言ふんぢやないがね。どうも君が邪魔になるんだ。

門番。家主さんの御命令でしてね、こいつを直しておけと、かう言はれましたんで。

乳母。(食堂から登場) 仕様のない人ですね、あなたはそんな事で、ここにこなければいけないんですか。

主人。ばあや、黙つてゐてくれ。

乳母。あなたのお部屋があれで狭いんですか。

主人。頼む、この部屋に入つて来てくれるな、おれはあの部屋を烟で一杯にして来たんだ。

乳母。それからこの部屋は石炭の煙で一杯にして。まあちよいと窓位は開

けさせて下さいまし。

主人。(熱心に) 開けんでいい、開けんでいい、やれやれ、ばあや、そんな事は一つも頼みはせん、それよりあの門番にちつと外へ行つて貰ふやうに言つてくれ、いつもいつも何かぶつぶつ獨りでこぼしてゐるんだ。

乳母。(窓から) お前さん何でそんな處でまごまごしてゐるんだい。あつちへ行つておくれ。

門番。なぜでござえます。家主さんのお言ひ附けなんです。

乳母。いいよ、いいよ、後からでも出来る事ぢやないかね。

門番。へえ。そんならどうとも。(ぶつぶつ言ひ乍ら退場)

乳母。(にがい顔で) あなたはまあいつか窒息しておしまひなさいますよ。そんな時には、この家にコレラがあるんだつていはれますよ。あなたも

大將のお息子さんぢやございませんか。それを悪い臭ひばかり擴げていらしつて。

主人。まあ待つてゐてくれ。おれもいつか一度は大將になるからな。

乳母。へえ、あなたが。あなたなんぞいづれ乞食にでも成るのがおちですよ。化學だとかフイジオノミイだとか言つて、家中あのくさい匂で一杯ぢやございませんか。

主人。人相學ではない、フイジツク物理學だ。まあともかく御願ひだからこのおれの邪魔をしないでゐてくれ。

乳母。あら、錠前屋が参りましたよ。

主人。こつちへ呼びな。

乳母。あなた、あいつと一度お話をすつて、何をしたか聞いて御覽なさい

まし。何だつてまああの男は昨日自分のおかみさんをぶつて、ぶつて、血だらけにしたんだらうね。

主人。よしよし、聞いておくよ。(主人の妹リイザ殆ど聞えない位に階梯を下りてくる。書棚の前に立止り音もさせず聞く。)

乳母。どうかあの錠前屋にかう仰つて下さい、若し何だと只ぢや捨ておかないぞ。

主人。すつかり脅しておくからいいよ。心配はいらない、いらぬ。だからまあ今はあつちへ行つておくれ。

乳母。びしびしやらなくちやいけませんよ。あなたはあんな連中をまるで紳士扱ひでお話なさるんですね。

主人。よし、よし、もう澤山だ。ところで奥さんは内かい。

乳母。まだお歸りがございません。晝の飯をおすましでワギンさんの處にお出ましになつたきり、さつぱりお見えに成りません。あなたもしつかりなさいましよ。あなたはまだ奥様の夢を見てゐらつしやるのですもの。

主人。ばかな事をいふな。いい加減にしないと腹を立てるぞ。

妹。ばあや、お前は兄さんのお仕事の邪魔をするのね。

主人。おゝ、お前ゐたのか、どうしたんだい。

妹。どうとも。

乳母。お嬢様、あなたすぐ牛乳を上らなくてははいけませんよ。

妹。知つてゐますよ。

乳母。奥様の事では私も申上げたい事がございます。私が之で奥様の體でしたら、もうとうの昔に誰かよその殿方と好い仲になつておりますよ。

さつぱり奥様をお構ひにならないのですもの、誰の目にも、まるでお粥は喰べたが、お皿は據り出しておくといふやうな方ですね。お小さいのも一人もなくつて、こんな事では女の身にとつて何の楽しみがあつて生きてゐられませう。奥様とそれから……。

主人。ばあや、おれはほんとおこるぞ、出て行つてくれ、この、この、洗濯女め。

乳母。まあまあそんなにすぐお腹立ちなさいますな。それでは錠前屋の事をお忘れになつてはいけませんよ。(退場し乍ら) お嬢様、牛乳は食堂にございます。あなた滴劑を召上りましたか。

妹。えゝ、えゝ。

乳母。それではよろしうございます。(食堂に向ふ。)

主人。(見送り乍ら) めづらしいばあさんだ。愚劣極る。その上にしつこくて。ところで體の工合は。

妹。おほきに。

主人。それは結構だ。(とラ、ラ、と唄ひ乍ら) それは結構だ。うまい工合だ。

妹。兄様、ばあやの申した事本統ですよ。

主人。それは疑ふよ。年よりの言ふ事もたまには當るが、眞理は若い者にあるよ。ほうら御覽、例の沈澱物が出來たよ。

妹。ばあやが言つた通り兄さんはちつとも姉様を構つてお上げになりませんのね。

主人。(悲しげに優しく) お前といひ、ばあやといひ、いつもおれの邪魔

をするのだなあ。そんならおれの女房は啞かい。言ふ事があれば自分でおれに言へるぢやないか、もしもおれがその、何かその、爲すべき事でもしないといふならな。ところが、あいつはいつでも黙つてゐる。だからどうしたといふんだ。どうしたと。(食堂から錠前屋登場、稍酔ひゐる様子。) やあ來たね、今日は。

錠前屋。御機嫌よろしう御座います。

主人。實はかういふ次第なんだ。一つ小さな増塙を慥へてもらひたいね。

丈夫な圓錐形の蓋をつけて、上の方には圓い口を開け、そこから管を立てるんだ。いいかね。

錠前屋。畏りました。早速取り掛ります。

主人。ここに下圖があるから。おや、とうにあるかな。まあちよいと來て

くれ給へ。(錠前屋と共に食堂に入る。テラアスの扉を獣醫叩く。妹扉を開く。)

獣醫。ああお内でしたか、これは。これは。

妹。今日は。

獣醫。(鼻をすぼめて) 先生も御在宅ですね、この匂でみると。

妹。どちらからお出でになりましたの。

獣醫。療治をやつて来ましたよ。總督の奥さんの小犬がね、女中がドアを閉める時に尻つぽを狭まれたんです。それで一寸繻帯に行つて来ました。お禮にルウブル金貨を三枚頂戴しました。それがここに在りますがね。僕は之であなたにボンポンを買つてこやうかと思ひましたが、ひよとかうも考へたのです、犬のお金であなたに甘い物を買つてくるなん

て、氣の利かない話だとね。それでまだ茲に持つてゐます。

妹。それは結構でしたわ。まあ腰をおかけなさいまし。

獣醫。ともかくここは例の匂がぶんぶんしてゐますね。譯の分らぬお道樂もあればあるものだ。おい君、もう煮えてるぜ。

主人。(登場) すつかり煮えなくなつていいのだぜ。ぢや、これはどうだ。君らはなぜ僕に知らしてくれないんだ。

獣醫。だから言つたぢやないか、もう煮えたつて。

主人。(悲しげに) 然し君だつて分つてゐるぢやないか、すつかり煮えなくなつていい事を。

(錠前屋登場)

妹。そんな事私達がどうして存じておりました。

主人。(不平らしく) やれやれ、もう一度やり直した。

錠前屋。且那樣、それでは一ルウブル頂かして。

主人。一ルウブルかい、よし、すぐだ。(隠しを残らず探して) リイザ、お金はちつとも持つてゐないかい。

妹。え、お金はばあやが預つておりますわ。

獸醫。僕の所にいくらかあるよ。ここに三枚ある。

主人。三ルウブルかい。頼む、そいつをくれ給へ。おい錠前屋さん、ここに三枚あるぜ、いいね。

錠前屋。はい、これで御勘定はすみしました。有りがたうございます。それでは。

妹。兄さん、ばあやがお願いした事があるでせう。あの人に言ふ事を。お忘

れになつて。

主人。なんだい、言ふ事つて。ああさうか。ふむ成程。エゴル、すまない、それではと。リイザ、お前話してくれないか。(妹首をふる。)ではと。エゴル、僕はお前さんに言ふ事があるがね。之はその、内のばあやの頼みだがね、おれに言ふてくれといふ。つまりかうなんだ。お前さんがその。かみさんをひどく撲つたといふぢやないか。こんな事言つてすまないがね。

錠前屋。(立ち上り) 手前はあいつを撲ちのめしました。

主人。では本統なのか。さうか。然しねえ、それは良くないよ、全く。

錠前屋。(脅す如く) 褒めたこつちやございますまいて。

主人。では分つたかね、どうしてかみさんなんか撲つのだ。それぢや獸だ

よ。エゴル。そんな事はやめなさいよ。お前だつてその、人間ぢやないか。道理の分つた人間なんだ。この世の中で一番立派な、上品な人間なんだ。

錠前屋。へえ、手前がですか。

主人。さうとも。

錠前屋。旦那。旦那は手前が女房をぶちのめした譯でもあいつにお尋ねなさいましたか。

主人。いやまあ、お前も分つたら。人を打擲するといふ事はよくない。誰でも他人を打つ事はよろしくない。分りきつた事ぢやないか。

錠前屋。(笑ひ乍ら) だが手前も撲られましたぜ。それが中々小ひどくでしてね。家のかかあといふやつは、あいつは人間ぢやございません、あ

いつはその、悪魔です。

主人。ばかな、悪魔とは何のことだ。

錠前屋。(勢よく) もう御免を蒙りませう。なあにかかあはもつと撲つてやります。風で草がぶつ倒れるやうに、かかあがへたばる迄うんとなぐりつけてやります。(食堂に退場)

主人。まあちよいと聞いてくれ、お前自分で言つてゐたぢやないか。あれ、もう行つてしまつた。ひどく腹を立てた様子だな。ばかばかしい。ばあやといふやつはいつも何か持ち出す。おもしろくもない。(惱ましげに入口の垂れ幕の後に行く。)

黙醫。先生中々説法したものだ。

妹。ほんたうに兄さんといふ人はおかしな人ですこと。

獸醫。僕だつたらステッキである錠前屋の口へ一つくらはせませんがね。

妹。まあ。

獸醫。いや之は失禮、僕も言葉が少しぞんさいですね。然しあの錠前屋の言ふ事にも一理ありさうですね。あいつがぶたれた、だからあいつもぶつてやるのか。僕がそれからもう一つ結論をつくると、だからあいつが又ぶたれる。

妹。どうぞもうそんな事を仰らないで。

獸醫。刑法といふやつはこの論理を基礎にしてゐますよ。

妹。私はもうそんな亂暴のお話は本統にいやでございます。私はこはくつて、こはくつて。それにあなたはわざと私の神経を荒立てやうとなさるやうに、いつもそんなお話をなさいますのね。おゝいやだ、あの錠前屋

のおかげで私はひどく恐ろしいやうな心持がしますわ。あの男のすごい様子ですことね。それからあの大きなおこつたやうな目は、どこかで前に見た事があるやうですわ、あの時、あすこで、あの人の中で。

獸醫。いやもうそんな事は考へないこつてすよ。あんな錠前屋の事なんかやめだやめだ。

妹。それならあれが忘れられませうか。

獸醫。そんな事をおしやべりして何の役に立ちます。

妹。血の滴れた所には花は咲きませんからね。

獸醫。ところでそこに生へるものは。

妹。(立ち上りあちこちと歩み乍ら) そこには唯憎みといふものが生へます。亂暴な事や憎らしい事を耳に聞いたり、赤いものを見たりすると、

私は重々しい恐ろしい感じになります。それから目の前にはすぐに又黒い獣のやうな大勢の人や、血だらけの人の顔や、砂の上の赤い血の流れが浮んで参ります。

獣醫。そんなに興奮してお話しなされると、今に発作が起つてしまひますよ。妹。私の足許には若い男がこめかみを打たれて倒れております。這ひ出さうとすると、頬だの頸から血がどくどく流れます。頭を空に向けると、つぶれた目や開いた口や血だらけの齒が見えます。やがて首がぐたりと砂の上に打伏しに、打伏した。

獣醫。(近寄つて) ほんとに僕はどうして上げたらいいんです。

妹。あなたは怖くはお思ひになりませんの。

獣醫。こつちへいらつしやい。庭でも散歩して見ませう。

妹。いえいえ、あなたは一體、私のこの恐ろしい心持がお分りになりませんの。

獣醫。いや分つてゐますよ。分つてゐますよ。

妹。嘘仰い。あなたにお分りになれたら私だつても氣が樂になれますわ。

私はこの靈の重荷を捨ててしまひたうございます。然し(間)私をよく理解して下すつて、この苦みを分けて下さらうと云ふ人の靈はどこにも見つかりませんわ。本統にどこにも。

獣醫。まあそんな話はもう止めませうよ。庭へでも出て見ませう。この部屋は何といふ句だ。まるで古い護謨靴を斷食祭の油でいためた句だ。妹。ほんとにこの句は。目まひがしさうですわ。

乳母。(食堂から登場) お嬢様、滴劑を召上る時間でございますよ。それ

から牛乳をまだお上りになりませんね。

妹。(食堂へ向ひ乍ら) ああ今すぐ。

獣醫。ばあさんは近頃如何です。

乳母。(テエブルの上を片付け乍ら) はい、どうやらかうやら。

獣醫。それは何よりだ。お達者ですか。

乳母。おかげさまで。

獣醫。そいつは惜しい。診察して上げるところでしたにね。

乳母。あなたはそれより犬でも療治なさいましよ。私は犬ころちやござい

ません。(妹登場。)

獣醫。僕はかういふ好い方を診察して上げるのが大好きでしてね。

妹。さあ参りませう。

主人。(テラアスの扉より手にレトルトを持ち登場) ばあや、湯をくれ。

乳母。只今お湯はございませんが。

主人。では一つぜひ頼む。

乳母。それではお待ち下さいよ、湯沸しがもうすぐ沸きませう。旦那様は

錠前屋にお話し下さいましたか。

主人。勿論さ。

乳母。びしびしやつて下さいましたか。

主人。その通りとも、あいつも怖くて震へてゐたよ。おれはかう言つてや

つた、こら、貴様をやつちまうぞ。

乳母。警察へですな。

主人。なにに、同じやうなものだが、裁判所だ、治安裁判官のところだ。

乳母。惜しい事に警察と仰つてびつくりさせておやりになればようございましたのね。それからあの男は。

主人。それから、それからあの男の言ひ草はかうだ、旦那、お前さんはばかだ。かだ。

乳母。(信ぜざる如く) まあとんでもない。

主人。いや、本統の話だよ、あいつめかう言ふのだ、お前さんはばかだ、お前さんと何の関係もない事に、鼻を突入まなくつていいぢやないか、とまづかういふ調子だ。

乳母。あいつがそんな事申したのですか、そんな事言へたもんでせうかね。主人。ちよいと待つてくれよ、實はあいつが言つたんぢやない、このおれが自分に言つたんだ。考へたのはあいつで、口に出したのはこのおれだ。

乳母。まあ、あなたといふ方は。(侮辱された心持で退場しやうとする。)

主人。お前自分でここへ湯を持つて来ておくれよ。あの女中とききたらおめかしばかりしてけつかる。そして何でもぶらさげておく女だ。シャツでも、上着でも。

乳母。あの女中は家主さんの息子とおかしいんでございますよ。

主人。ばあやは妬いてゐるね。

乳母。まあばからしい。あなたはこの家のあるじでゐらつしやるのですよ。そんな若い娘に間違ひがあつちやいけないと仰つてやらなければいけませんよ。

主人。まあまあそんなに氣に懸けるなよ。然し之が何かお前の身に彼此あるといふなら、おれは一日中でも馳け廻つて、之は好いとか悪いとか誰

にでも言はなくてはなるまいがな。ともかくそんな事はおれの役目ぢやないからね。

乳母。そんならあなたの御勉強は何の爲でございます。どういふ目的があつて。(獸醫の妹にして富豪の寡婦メラニイ、テラアスに通ずる扉から登場。)

主人。もう行つてくれよ。おやおや、メラニイさんですね。

寡婦。ごめん下さいまし。

乳母。戸も閉めない人があるよ。(扉をしめる。)

寡婦。大層御機嫌のやうですね。

主人。よく御出でになりました。もう少しのところではあやにぶつぶつこぼされて殺されさうな所でしたよ。それはさうと今日は面白い仕事をや

りました。

寡婦。あらさう、それは結構ですこと。私はあなたが早く有名な方にお成りを祈つてばかりおりますのよ。

乳母。(ぶつぶつこぼし乍ら退場) 町ぢやみんな旦那様の事ばかりしやべつておりますよ。とうに有名な方です。

寡婦。私はねえ、あなたがパステエルのやうなお方にお成りだといひと思つておりますの。

主人。そんな事はどうでも好いとして。あの化学者はパステヨルと讀むのです。候の本ですか、あなたのお持ちなのは。御覽でしたかね、どうです、小説よりはすつと興味がありませう。

寡婦。ですけれどねえ、あの記號といふのが。

主人。方式のことですか。

寡婦。あれなどはさつぱり分りませんの。

主人。あれは少し勉強が要ります。それでは今日は植物生理の本をお読みになるやうにお貸しませう。だがあの化学の御勉強の方は何はともあれみつちり十分の注意でやつて頂ませうね。あなたには是非とも化学を勉強して頂ませう。これこそ全く學問らしい學問です。それにまだほかの學問と比較すると、發展も哀れなのです。ところが今に成ると化学は何物をも見通す目のやうに思はれます。その鋭敏な大膽な眼光は、燃え上る太陽の上へでも、暗い地球の奥底へも、人の心の遠い見えない深みへも(寡婦嘆息す。)岩石の秘密の生育の中へも、樹々の沈黙の生活へも、みんな貫いて入つてゆきます。化学は一切のものを上から見渡し

てゐます。至る所に調和を発見し乍ら、又しつこく人生の根原と發端とを研究します。化学は之を発見するに違ひありません。もし化学が發達して、物質の合成の秘密を會得したら、一のレトルトの中で生きた物を製造が不可能ではありません。

寡婦。(悦んで) あなたはなぜ講義をなさいませんの。

主人。どうして又そんな事を。

寡婦。あなたはぜひとも講義をなさらなければいけませんわ。そんなに滔々とおしゃべりになれますのに。かうして伺つておりますと、あなたのお手にキッスがしたくなりますわ。

主人。(自分の手を眺め。) さあ感心しませんね、僕の手ときたらめつたに綺麗なんて事がありませんからね。手當り次第に物を掴みますから。

寡婦。(親しげに) 私あなたのお爲ならどんな事でも致しますわ。本統にあなたが。あの私はあなたの事ばかり考へておりますのよ。ほんに品の好いお立派な方だこと。どうぞ御用がございましたら仰つて下さいまし。何でもどんな物でもお望み下さいましな。

主人。いやあなたは。

寡婦。あの私のお役に立ちますことは。

主人。お宅では鳥をお畜ひでせうか。

寡婦。あの鳥と申しますと。

主人。なに鶏のことですよ。御存知でせう。そらあの番ひですよ。牡鶏とそれから牝鶏なんぞの。

寡婦。ええ、分つております。宅にも少々は居りますが。あれが何のお役

に立ちますの。

主人。實はあなたが毎日新しい卵を送つて下さるとね。本統の生み立てのまだ温い位のやつです。僕は非常に卵の蛋白が要るのです。ところが宅のばあやはけちでしてね。がどうして卵の蛋白が要るのかさつぱり分りやしないのです。そうして古い卵ばかり寄越すのです。しかもそれも僕に長いこと散々説法をした揚句の事です。おまけに苦虫を潰したやうな顔まで附物です。

寡婦。まああなたは大層慘酷な事をなさいますのね。

主人。慘酷ですつて。それは。

寡婦。いいえ、よろしうございます。之から毎朝生み立ての卵を一ダアスづつお送り致しますせう。

主人。それは有難い。之で助かる。僕はあなたに特別にお禮申し上げますよ。實にどうも、あなたは親切なお方だ。

寡婦。あなたはほんの坊ちやまですねえ。むごい事をなさる坊ちやまですわ。何にもお分りになつてやしない。

主人。全く分りませんね、なぜ僕が惨酷なんだか。

寡婦。待つてゐらつしやいませ。ちきにお分りになれませう。奥様はお内にゐらつしやいませんの。

主人。あれはワギンのとこの會へ出かけました。

寡婦。あなたワギンさんお好き。

主人。あの畫家ですか。それはもう。あいつと僕とは古い馴染です。一緒に高等學校へも通つたし、後では大學の方へも行きましたしね。(時計を

見る。) あいつももとは自然科学をやつてゐたんですが、二度目の學年にアカデミーへ轉じました。

寡婦。奥様も大層あの方がお氣に召してゐらつしやるやうですね。

主人。その通りですとも。中々しつかりした男です。唯一寸偏屈なところがありますかね。

寡婦。それであなはちつともお氣にかけてゐらつしやいませんのね。(獸醫テラアスの扉を叩く。)

主人。(扉を開き。) 僕が氣にかける事が何かありますか。やれやれ、ばあやが又扉を閉めていつたもので。

寡婦。あら、ゐらしたの。

獸醫。お前もここか。一體水はどこにありますね。リイザさんが欲しいと

お仰るのですが。

主人。妹が気分でも悪くしましたか。

獣醫。なかに、大した事はありません。滴劑を上らうと仰るのです。(食堂に行く。)

主人。一寸失禮させて下さい、一度見てきますから。

寡婦。行つてゐらつしやいと。でもすぐ歸つて来て頂戴ね。

主人。ええ、すぐですとも。どうです、その間庭でも歩いては。

寡婦。おそれいります。

主人。妹もおりますよ。(叫ぶ)ばあや、水はどこにあるんだい。(退場)

獣醫。(食堂より現れ。)おい、その後はどうした。

寡婦。(口早に小聲で)あの、ヒダトピロモルフィスムスつてなに。

獣醫。なんだつて。

寡婦。ヒ、ダト、ピロ、モルフィスムスよ。

獣醫。そんなもの知るものか。水火花でもあるかな。

寡婦。教へてよ。

獣醫。先づこんな見當かね、ピロはピロテヒニク、花火術とでも言はうか、それから、メタモルボウゼは技藝品。一體何だいその話は。誰かお前に謎でもかけたのか。

寡婦。その先はどうでも好くつてよ。もう御用はないわ。

獣醫。お前がここの主人をあの奥さんの手から奪ひ取つたらだな、石鹼の工場でも建てさせるのがいいよ。化学者の奥さんといふ柄ぢやないからな。(庭に向ふ)

寡婦。まあひどい、失禮な。(立ち上り後を向く。)

女中。(登場) こちらのお嬢様がどうぞお庭の方へお出で下さるやうにと
いふ事でございます。

寡婦。これは憚りさま。(乳母、湯を入れたる釜を手にして登場、女中は茶
道具を載せて盆を持つ。)ばあやさん、何を持つてゐらつしやるの。

乳母。且那様の御用のお湯でございます。

寡婦。それでは實驗にお使ひなさるのね。

乳母。はい、何でもかでも實驗、實驗でございます。(退場)

寡婦。(食堂の方をちらりと見て) お女中さん。

女中。(扉の内にて) 御用でございますか。

寡婦。奥さんは毎日繪かきさんのところへお出かけになりますの。

女中。雨模様でしたり曇つたりしておりますとお出ましはございません。
そんな時にはワギンさまの方からお越しでございます。

寡婦。さあお前さんもそこは氣が利いてゐるだらうね。

女中。満更でもございますまい。

寡婦。もしや何か二人の間で思ひ當つた事でもあつたらね、私に話して下
さいね、いいから。

女中。承知致しました。

寡婦。ほんのお印だよ。(金を與へて)それからおしやべりしつこなしだ
よ。お前さんに迷惑はかけないからね。

女中。有り難う存じます。ワギンさんは奥様のお手をキッスなさいますよ。
寡婦。そんな事ぢやだめよ。よく氣を付けてゐておくれよ。

女中。たしかに承知致しました。

寡婦。私今お庭の方へ行きますからね、もし旦那様が見えたら呼んでおくれよ。

女中。はい。

乳母。(登場) お前さんといふ人はお茶碗でも何でもがちやがちやぶつくて、まるで鐵の物のやうな音をおさせだね。あれでは何もかも壊れてしまふよ。

女中。へえ私が。私だつて瀬戸物がこはれ物だ位知つてますよ。

乳母。まあまあそんなにおこりなさんな。一體あの人お前さんに何だつて聞いたの。

女中。(乳母を隣の部屋に連れていつて) あの方はね、うちの奥様の御様

子を聞きに来たのよ。

乳母。(女中の後に従ひ) そんな事ならぢかに奥様のところへ行つてお聞きになればいいに、奉公人になんか根掘り葉掘り聞いて。(テラスに家主登場、帽子を脱ぎ、室内を見廻し、壁紙に觸れてみる。咳をする)

女中。(食堂で) あの方だつて行つては御覽になつたのさ。ばあやさんはいやに奉公人だなんていふが、これでも人間ですからね。お前さんだつて憚り乍ら奉公人の部ですよ。

乳母。私は自分の身分といふものを心得てゐるよ。昔は奥の方といへば奉公人に口を利かれたものぢやありやしない。ほんの御用丈を仰つて、それつきりさ。けふ日はまるで様子が變つて、誰もかも主人顔したがつてゐるのだもの。それで何一つもの用にも立ちやしない。ぢや、そこに

お出では。

家主。へえ、手前です。ばあやさん、大層結構なお天気で。
乳母。何御用。

家主。旦那様に少々。ぜひ折入つて申上げたい事がございますので。
乳母。それではすぐ呼んで来て上げませう。(退場)

女中。(部屋を一寸見て) 今日は。

家主。ほう、お前さんか。いつも乍ら可哀しい御様子だね。

女中。お願いだから私に觸つちやいやよ。

家主。いかゞなものでせうな、文なしの男やもめにもちつとお手柔かに願
ひたいね。せめて晩方には御一緒にお茶位頂きたいものですがね。
女中。お黙りてば。

主人。(登場、その後乳母) 君ですか、僕のところへ。

家主。さやうでございます。

主人。それでお話は。

家主。實は家賃の事で少々。

主人。(稍々激した様子で) よく聞き給へ、僕がこの邸を君にお譲りした
時には、まる二年といふ間代金を待つてゐましたからな。まあそれで、
一體いつお拂ひすればいいのです。

家主。昨日頂く筈でしたが。

主人。いやともかくまづい時にお出ですな、僕は忙しくて、そこへ君が
くるとすると。全體その。

家主。はい、然し手前は元來この御用で上つたのではありません。手前

の方で忘れませんやうに申上げた迄でございます。

主人。そんな事は宅のばあやか家内の方を覚えてゐて下さい。金はどこかにありますがね、さあどこといつて僕は知らんが、いづれ筆筒のへんでせう。家内に届けさせて上げます。さもなければばあやにでもお持たせしますから。ではいづれまた。(食堂に退場。)

家主。一寸お待ちを願ひたいんで。

主人。何事です、いつたい。

家主。實はお宅の御地面のことです。

主人。あれをどうなさらうと仰るのです。

家主。お拂ひになるお話ぢやございませんでしたか。

主人。何處の呆けがあんなもの買ひます。取りどこのない地面ぢやありません。

せんか。隅から隅迄砂地で。

家主。(物を案ずるらしく) それは御尤で。手の付けやうのない御地面です。

主人。さうれ御覽なさい。

家主。先づ手前位なものでせう、あれを頂かうと申しますのは。

主人。君はなぜ又あんなものを欲しがるんです。

家主。そこが御相談でございます。實は私は御當家のお隣りの地面を求めましたので、それでどうもお宅のも頂戴が致したくなりまして。使ひ道も御座いますのでね。

主人。ではよろしい。お譲りませう。益々溜る一方ですな。さうでせう。家主。と申しますのは、さあ何と申したらよいか、手前がその發展を致し

ますので。

主人。君は中々おもしろい男だ。全體あの砂原が何の役に立つのです。

家主。實はでございます。手前には商業學校を卒業致しました忤がございまして、之が中々學問のある男でございます。ところがこの忤が又工業の方面が非常に精しうございましてな。それで手前も先づこの露西亞の工業を發展させたいと考へたのでございます。そこでほんの型ばかりではございますが、一つ工場を建てまして、麥酒罐の製造を初めやうと存じました。(女中食堂の入口に現れてこの話を聞く。)

主人。(大聲で笑ふ。) 成程君は滑稽だ。それで抵當金貸の方はもうおやめですか。

家主。とんでもない。抵當金貸と申しましても、之は人様の爲めでございますか。

ます。一種の慈善機關で、同胞の務めとして致してゐるのでございます。

主人。(笑ふ。) 成程ね。まあともかく宅の地所はお買上げ下さい。そんな事に願ひませう。ではいづれ又。(笑ひ乍ら退場)

家主。御免蒙ります。(間)おい、ねえさん、どうして 那は行つておしま

ひだらう。二人ゐなければや商賣は出来ない。それにもうあばよだ。

女中。(肩をそびやかし) 旦那様が本氣でゐらつしやるものかね。

家主。さうかね、おれには分らん。それではいづれ上るとしやう。(退場)

門番。(女中の後から) ストオブの燻るのはどこだね。

女中。まあとつけもない聲をして。何ですつて。

門番。何もびつくりするには當らねえよ。ストオブがくすぶるつて聞いて來たのだ。

家主の悴。(食堂から登場) ここぢやない、ばかだなあ、臺所だよ。

門番。へえ、私はここだと思ひまして。(退場)

家主の悴。(性急に) おい、どうした、ちよいとした部屋に置いて、月々十五ルウブル下さる。之でどんなものだ。

女中。向ふへいつて下さいよ。何です、今言つたのは、まるで馬でも買ふやうな積で。

家主の悴。まあお待ちよ、おれはかう見えても商人だ。お前なんぞどんな男の所へ嫁に行けるか考へてごらん。まづ職人かね、錠前屋が女房を撰つやうに、お前をなぐり付ける職人だ。ところがこのおれならお前を無暗な金は使はずに、しかも立派に家を持たせる。ひもじい目にも會はせない。その上に、お前を學校へ入れて仕上げてみせるよ。

女中。それぢやお前さんは私に。(間) あたしは之でも立派な女ですよ。

何にしても肉屋のクラポフは月々私に百ルウブル出すといつたからね。

家主の悴。だつてあいつはもうぢぢいやないか。

女中。そりやあたしだつてあんな奴厭だわ。

家主の悴。それ見たことか。だがあれはお前に。

女中。七十五ルウブルお出しよ。

家主の悴。何だつて、七十五ルウブル。

女中。ああ、それから一年分の勘定を手形で前にお出しよ。

家主の悴。(驚いて) おいおい、とんでもない。

女中。さうさ。(互に試すやうに見合ふ。テラアスより錠前屋登場、かなり強く酔つてゐる) しつ。お前さんのお父つあんは行つておしまひだよ。

家主の悴。行つたつて。では御免よ。(退場)

女中。又お前さん何處をうろついてゐるの、臺所を通つていられないのかい。旦那は臺所を通つてお出でだよ、それにお前さんは。

錠前屋。黙れよ。旦那を呼んでくれ。

女中。又ぐでんぐでんに成つてゐて。旦那様に何の御用があるの。

錠前屋。そんな事はお前の知つたこつちやない。呼んでおくれよ。おれ様は御自分でお話なさるのだ。呼んでくれよ。

女中。(食堂に去り叫ぶ。)ばあやさん。

主人。(垂幕の中から出て来て。)なに大きな聲を出すのだ。ほう、お前さんか。なにか用かい。僕は手が離されないから、用があるならさつさと願ひたいね。

錠前屋。お待ち下さい。私も少々酩酊致しております。手前はお酒の氣がございませんと、更にお話が出来ませんので。

主人。よしよし、それで用向きは。(乳母、食堂から登場、その脊後に女中)錠前屋。先日旦那は手前をみんなの前で恥をおかせになりました。それから此頃はいやに手前の家のやつを庇つて、何のかのと口をお利きなさいます。一體何だつてそんなに手前に恥をかかせるんで。

主人。ばあや、それ御覽。おい僕はちつとも君をいぢめるやうな氣なんかありやしないよ。

錠前屋。ありやしませんて。手前は若い時からずい分恥をかかせられました。たがなあ。

主人。よしよし、分つたよ。

錠前屋。おつと待つて下さい。全體この世の中には誰ひとりとして手前を
目に掛けてくれる人がございません。誰も手前の心を分つてくれる者も
ございません。女房も可哀がつてくれません。けれど手前は本統に人様
に可哀がつて頂きたいのです。あゝ、いやだいやだ。

主人。さう大きな聲を出しなさんなよ。

乳母。本統にこの酔つばらひめ、行つておしまひ。

錠前屋。手前は一體人間でせうか。どうしてかう誰も彼もおれをいぢめる
んだらうな。

乳母。ばかばかしい、お前さんなんかどうでも好いよ。(食堂に逃げ込む。

中庭で乳母の呼ぶのが聞える。)

主人。まあ氣を落ちつけるが好いよ。ばあやおれにかう言つたがね。

錠前屋。あんな奴追拂つておしまひなさい。旦那だつてもうお髭がありま
す。髭の生へた人間にばあやが付くなんて、何處にそんな事が書いてあ
るものか。旦那、まあ一度聞いて下さい。手前はあなたを崇拜しており
ます。どうして旦那は之で並々の人間ぢやない、とかう手前は睨んでお
りますんで。ところが誰かの前へ出ると旦那が小さくなつてゐるのが、そ
れが手前にはくやくしてくやくして。旦那、もしあなたがその氣なら手
前はあなたの前に膝をついて何でもいふ事をききますよ。旦那と二人の
間なら何でもいふ事ききますよ。決して侮辱されるたあ思ひません。だ
があの獸醫さんの前文は勘辨して下さい。女房に付いちや誰のいふ事も
聞きません、今後も血の出る位撲つてやります。手前はあいつが可哀い
いんだ。あいつは手前に是非その。(獸醫、寡婦、妹、乳母、女中かけ込

みくる。

妹。どうしたの、兄様、どうなさいましたの。

獣醫。(主人の妹を扶けつつ) 君、どうしたんだ。

主人。いや皆さん。

寡婦。(乳母に) 門番の人を連れて来て下さいな。

乳母。(退場、叫ぶ) もんぼん。

錠前屋。ふん、大層鴉が飛んできた事だ。旦那、あれを追拂つて下さい。

獣醫。どうだ、お前さんうちへ歸らないかね。

錠前屋。手前は悪黨です。

獣醫。(眉をひそめ) だが歸つてくれるだらうね。

寡婦。警察の人を呼んでくるよ。

主人。とんでもない、そんな事は無用だ。では錠前屋さん、もうお歸り。

いづれ後で君の家へ出かけるよ。(乳母と門番と食堂の扉の内に登場)

錠前屋。ぢや旦那が来て下さいますんで。

主人。あゝ、行くよ。

錠前屋。旦那すみませんね。だが嘘をつくとは。

主人。請合ふ。

錠前屋。有りがたうございます。ではお暇を。こんな連中はこちらの旦那

に比べるとまるで砂ぼこりのやうな人間共だ。では御免なさい。(退場)

門番。もう用はありませんかね。

主人。あゝもう好い、行つておくれ。どうだばあや、この始末を見ろ。

(乳母嘆息す。)お前も中々有難い事をしてくれるね。

妹。あの人は本統に怖いやうだわ。私は氣味が悪くて。

寡婦。後から申すやうですけど、あなたがあんまり優しくなさり過ぎますよ。

主人。ですが僕は實際あの男に對して悪かつたと感じてゐるのです。

妹。もつとほかの錠前屋に取り替へた方がよかつてよ。

獸醫。職人といふものはどれも之も大酒をくらふやつですからな。

主人。どうも氣がいらいらしてひどく疲れちやつた。僕は今日は全く辛い目に逢ひましたよ。つまらない事の爲に喧嘩して廻らなければならなかつたんですからね。今日は青素加里で完全な實驗をやる筈なのです。そこへこんな事で。おいリイザ、茶でも一杯注いでくれないか。

妹。ここへ持たせて差上げますわ。あなたはあの小さい食堂がお嫌ひです

から。

主人。おやそれは憚り。僕はあんな暗い部屋は御免だよ。尤もこの家には明るい部屋なんぞどこにも無いがね。

寡婦。その通りでございますね。

獸醫。おい、さつきの字は何といふのだつけ。

寡婦。なんの字なの。

獸醫。お前がおれに聞いたぢやないか。

寡婦。何にも伺はしませんわ。

獸醫。忘れたのかい、ほうれ御覽。ねえ君、妹は君から何か難しい言葉を聞くとね、その意味を僕の所へ聞きにくるのですよ。

寡婦。(激して) まあ憎らしい。あなたは本統にひどい人だわ。私は聞き

馴れない字は忘れつぼくて。何をお笑ひなさるのよ。(女中登場、窓に近いテエブルを手際よく覆ひ、注意深い様子で茶道具を用意する。)

主人。兄さんに何をお尋ねになりました。
寡婦。(晴れやかな顔で) あの私。忘れてしまひましたの、ヒダト、ピロ、モルフィスムスつてどんなものでしたか。

獣醫。それでね、僕は水火花だつて言つたのさ。

主人。(笑ひ乍ら) 何ですつて。(妹登場、卓子の傍で茶の用意をする)
寡婦。あら、見つともない事をいふのね。

主人。(笑ひ乍ら) あなた方お二人の間といふものは全く不思議ですわね。
まるでしよつちう口喧嘩だ。之は御免なさい。お氣にでも觸りましたか。
寡婦。まあ待つて下さいまし。兄は私が大嫌ひなのでございます。私ども

はお互に他人ですもの。兄はポルタワの叔母の所で育てられましたし、私はヤロスラフの叔父の所で大きくなりましたのですもの。私どもは二人ともみなし兒でございますのよ。

獣醫。(頗る冷淡に) 哀れだなあ。

寡婦。二人とも餘程成人しましてから初めて會ひましたの。それでどつちも氣が合はないでおりますの。兄にはどんな人も氣に入りませんで、本統に不幸な生活をしておりましたの。ですからすべての世の中のものゝを恨んで、私の所へなぞもさつぱり参りません。

獣醫。ねえ君、妹の亭主といふやつは人の好いちぢいでしてね、まだ生きてゐるんですよ。僕が妹の所へ出かけると、そのちいさんめ、自分を去勢してくれて頼むんですよ。

寡婦。嘘ばかり。

獸醫。そこで僕もいくら獸醫でも、どれも之も去勢出来る譯ぢやないつて返事しましたがね。

妹。ひどいお話ね。

主人。(無理に笑ふ。)

獸醫。ちと言葉が過ぎましたかね。

妹。お茶をお上りなさいまし。

獸醫。それから家へ歸つてくれるでせう。分りました。

寡婦。あなたあの、顕微鏡で水の中の海草を見せて下さつて。

主人。つまり海草の細胞ですね。ええ。よろしい、御覽に入れませう。すぐでは如何でせう。

寡婦。えゝどうぞ、うれしいこと。

主人。ではお出でなさい、唯御注意しておく事はあすこは臭いですよ。

寡婦。(主人に随ひ) そんな事何でもありませんわ。

獸醫。とんだ茶番だ。海草が見たいとぬかしやがる。牝牛め。

妹。(悲しげに、腹を立てた様子) あなたといふ方は單純で強くて、眞理を愛するお方ですのにね。

獸醫。さあ僕を撲つて下さい。

妹。どうしてそんな亂暴な風になさいますの。あなたは御自分からお氣を悪くしたりおかしな風をなさるのですわ。なぜでございませぬ。

獸醫。僕だつてそんな氣ぢやありませんよ。

妹。人生にはいろいろ野蠻な事や恐ろしい事や慘酷な事が澤山ございませぬ。

それですから私達は之を柔げたり改良しなければなりませんわ。

獸醫。といつて何の爲に人間は嘘をつくのです。人間が粗野であり、残忍である事は、人間の天性といふものです。

妹。それは間違ひだと思ひますわ。

獸醫。間違ひですつて。然しあなただつて自身さう考へ、さう感じてゐらつしやるのでせう。人間は獸だ、粗暴で、不潔なものだ。ああいふものは恐ろしいつて、あなた仰つたぢやありませんか。僕は忘れやしません。それでああなたの仰つた事を本統だと思ひます。然し今となつて人間を愛さなくてはいけないなんぞと僕に説法をなさるなら、僕はあなたを信用しませんよ。あなたは人間が怖いものだからさういふのだ。

妹。あなたには私といふものがお分りになれません。

獸醫。それはさうかも知れません。けれども僕の頭にも、人は何かしら欠くべからざるもの、楽しきものを愛し得るといふ事は入つてゐます。例へば豚です。之は我々にハムと脂を與へる。それから音楽です。海老です。繪畫です。みんな人は愛好します。けれども人間といふやつは、こいつは全く必要でもない、愉快なものでもありません。

妹。まあどうしてさう仰るの。

獸醫。眞理であると感じた時は、口に出す方が好いと思ひますね。僕も之で親切者に成らうとやつて見ましたよ。一人の若い男を町から拾つて来て、之を教育してやらうと思ひました。それでどうなつたと思召す。そいつは僕の時計を盗んで逃げてゆきました。それから今度は若い娘を町から引取りました。まだほんの若いお嬢さんでしてね。僕は二人で一緒

に暮して、ゆくゆくは結婚もしやうと思つてゐたのです。ところがある日この娘が酔つて来て、僕の顔に撲つてかゝるぢやありませんか。

妹。もうおやめ下さい。そんなお話はやめて頂きたう御座います。

獸醫。なぜいけませんか。一度僕の生活に付いて何もかもぶちまけてお話をしたかつたのです。さうすればきつと僕の心もさつぱりするだらうと思つたので。

妹。あなたは奥様をお貰ひになればよかつたのでせう。

獸醫。なるほど、お説の通です。結婚をすればよかつたのでせうね。

妹。若い娘さんをお探しになればよかつたのでせう。そのお方は。

獸醫。(しづかに)御承知の通りさういふ娘さんもとうの昔に手に入れてゐたかも知れないのです。まるで熊が蜜蜂の巢を取巻くやうに、その娘さ

んのまはりを取圍んでから、今となつてはもう二年といふ年月です。

妹。あなたは又仰るのね。私はあなたに私の固い決心は申し上げてあつた筈でございます。決して之ばかりは變更致しません。

獸醫。さうは言はないで下さい。僕は小ロシアの人間で、強情者ですから或は又ひよいとしてあなたが。

妹。(頗る感情的に)とんでもない。

獸醫。それならそれでよろしい。何かほかのお話でもしませう。

妹。あなたの強情には私怖くなつてしまひますわ。

獸醫。びくびく成さるには及びません。何も怖い事はありやしませんもの

(間。テラアスにて門番のいがみ聲する。妹ぎくりとして窓から見ると) 妹。あなたはお妹さんをどうしてあかも手荒になさいますの。

獸醫。(靜に) 第一に馬鹿だからです。第二には下品です。

妹。まあ。

獸醫。いやもうそんな言葉は二度使ひますまい。實際丁寧な言葉が使へないのは、その人間の不幸です。僕の妹の事を仰いましたね。一體誰が僕の妹なんです。はたちの年に金持の年寄に嫁に行つたのは、そもそも何の爲でせう。その後男を嫌つて厭氣がさしてから、もう少しの處で咽喉迄切り兼ねない所でしたよ。一度は首をくくつて、氣を失つてゐる所を見付けられ、最後には毒迄やりました。今は男もこの世にゐないので、あいつの方は益々暴れ廻つております。

妹。あなただつていくらか罪がおありなんでせう。なぜあなたはお妹さんを扶けてお上げにならなかつたのです。

獸醫。僕にも罪はあるかも知れませんが。然し僕は妹を扶けてやりましたよ。

妹。然しさうかと申してお妹さんが悪いばかりでもございますまい。

獸醫。勿論その爲ばかりとは言ひませんがね。あなたは妹がこの家に入りまする譯を御存知ありますまい。僕には分つてゐますがね。

妹。あなたの謎を解く事はおやめと致しませう。それよりも一體誰があなたにお妹さんの裁判官に成る權利を與へたものか、それを御自分に聞いて御覽なさいまし。

獸醫。それなら誰があなたに他人を批評する權利を與へたのです。誰でもこの權利は改めて貰はなくつても使つてゐるものです。批評をしないのは物を喰べないのと同じ事です。いづれも人間には不可能です。

寡婦。(非常に感動したる様子、その後から主人登場)本統に分りましたとは申すものの、一體あれは實物なんですかいませうか。

主人。さうですとも。みんな生きてゐます。生といふものは到る所にあります。そして到る所に秘密といふものがあります。不思議な深い生存の謎の世界と往來して、この頭腦のエネルギーをその本源の研究に費す、之が眞の人生といふものです。これが盡きざる幸福の泉です、生きた悦びです。知識の範囲内に於てのみ人間は自由です。すべて知識を持つてゐる場合に限つて人間と名を付けられます。人間が知識を持つてゐれば初めて正直であり善良です。善とは知識で造られるものです。この自覺を外にしては、善といふものは存在しません。(あはてて時計を見る。) おゝもう失禮しなければならん。では。こいつはしまつたわい。(退場)

寡婦。ほんにあの方の仰つた事あの方のお言葉をあなたにお聞かせしたか
つたわ。あの方はかう私に仰つたのよ、ただ私丈に、このメラニイきりに。
ほんにあのやうに言葉をかけて頂いた事は、私生れてから初めてですわ。
何か奇蹟のやうですわ、この私と。(獸醫笑ふ)何をお笑ひになるの。
(涙を浮べ)けれど私あの方の仰る事が分つたとは申上げなかつた。
あの方の思想にそのまま服従して参りますと申上げなかつたのは、私本
統にばかだこと。ライザさん、私全くばかでございます。ライザさん
考へてみて下さいまし。人間がまるで眠つたやうに生活をしておりま
す、そこを急に揺り起されて、目を開いてみるとう夜は明けて太陽が
上らうとしております。まぶしいと思ふと光が流れてきて、胸一杯に呼
吸をいたします、清い悦びに満ち溢れる心持で、丁度復活祭の夜のお祈

りの時のやうに。

獸醫。おいおい、どうしたんだい。

妹。まあお茶でもお上んなさいまし。お掛けなさいましよ、何かひどく興奮してゐらつしやいますわ。

寡婦。兄さんには分りませんわ。いえもう有り難うございます。私お茶は戴きません。もう歸らなければなりませんし。リイザさん、許して下さいね、御心配をかけて。私もう参ります。では又ね。どうぞお兄様に之上仰つておいて下さいました、私もう歸りましたつて、それからお禮を申しております事もね。本統にあの方の立派なお豪い方ですこと。(テラアスの扉から退場)

獸醫。あの女め、どうしたんだらう、さつぱり分らん。

妹。私には分つております。一度は兄も私をあんな風に感激させてくれたのでございます。あの人の言葉を聞いて、私も目の前から目隠しを取つて貰つたやうな心持が致しました。それから後は何事もはつきりと分つて来て、調子の好い、謎のやうな、それで又單純な、可哀しい、立派なものに見えました。けれどもその後で私は本統の人生を知つたのです。穢れに充ちた人生、獸性と不徳と殘虐に満ちた人生を學びました。疑惑と恐れが私をしひたげました。それからとうとう病院へ入れられたのでございます。

獸醫。もうそんな事は考へない、考へない。病院がどうしたといふんです。もう昔の話ぢやありませんか。

妹。私ももう澤山ですわ。(夫人と畫家テラアスの上に現る。)

獸醫。おや、誰か来たぞ、ああ、奥さんだ。それから畫家が。そろそろ僕の引上げる時刻だ。

夫人。まあボリスさんですか。リイザさん、兄さまはお部屋ですか。お願いですが私に少しお茶を注いで下さいな。(主人の部屋にゆく。)

獸醫。君、どうしてそんな蒼いぼんやりした顔をしてゐる。

畫家。本統か。さあどうしたのかなあ。リイザさん、繪の方は大分精が出ますか。

妹。今日はお休みですわ。

畫家。そいつは惜しい。繪の具の色は神経を静めるものですがなあ。

獸醫。ぢやあ誰も君がそんな顔をしてゐるのに氣が付かなかつたのかい。

畫家。誰もといふ事はないが、當り前だが。

妹。(嘆息して) ああ、赤いあの……………。

獸醫。では失禮。僕は出かけます。川へ蟹を探りにゆきます。それから自分で料理して食ふ、ビールを飲む、煙草をふかす。リイザさん、お見送りには及びません。又上ります。明日あたりに又。(夫人戻りくる)奥さん、左様なら。

夫人。おや、いらつしやるの、ではいづれ。(獸醫と主人の妹退場)

畫家。御主人は御承知ですか。

夫人。えい。すぐ参りますわ。

畫家。先生相變らず氣違ひのやうに御勉強ですかね。ホムンクルスでも出かさうと思つて。

夫人。まあ何ていふ物の言ひやうですね、少しお慎み下さいよ。

畫家。あのばかな木馬のやうな學者先生には實に腹が立つ。あの先生があなたに對してどんな風にするかと思ふと、全く許してはおけませんよ。實に奇怪千萬な。

夫人。私後悔いたしますわ、あなたとかうして好い氣になつて何もかもお話し申上げまして。

畫家。あなたは自由にお成りにならなければいけませんよ。あなたを尊敬する事知らないやうなやつは、容赦なさるに及びません。

夫人。無論さうは致しますわ。見てゐらつしやいまし。

畫家。といふとそれはいつの事です。何を期待してゐらつしやるんです。

夫人。私は主人の心の中でどんな位置におかれてゐるものか、それをちゃんと確めておきたいと思ひます。

畫家。何の位置もありやしません。

夫人。それならばそれでよろしうございます。さうなれば解決はごく簡単で、もし私が主人に對して零であるならば、私はこの家を引拂ひます。けれどももしさうでないとして、もし主人の愛がほんの疲れてゐて、その愛が夫を捉んでゐる理想の力の爲めに心の奥に深く隠れてゐるのですと、さうしたらどうでございませう。私が夫の傍を離れた時に、急にあの人の胸の中に新しく……。

畫家。どうぞさうなつて貰ひたいとお考へななでせう。

夫人。でも本統にさうなれば悲劇でございますよ。この私には悲劇といふものは堪えられません。

畫家。そんなにあの男の事が心配に成るのですか。

夫人。私はあの人の生活を苦めたくはありません。

畫家。あなたの考へるといふのは、つまりいやだと仰る事ですね。強い希望に勵みをつけて貫つて、その考へるといふ事はおよしなさい。

夫人。ええ、猛獸なら、獸なら考へるといふ事は致しますまい。然し人間である以上は、この地上から悪といふものを無くなす爲に、考へる所がなくてはなりませんからね。

畫家。自分から業務の犠牲に成るとか何とかいふお考へですね。リイザさんは自分の苦い哲學から割出して、あなたにひどい影響を及ぼしたものですね。

夫人。罪惡は憎むべきものでございませう。苦痛は厭なものでございませう。私は苦痛といふものを人間の輕蔑のやうに感じられます。他人に苦

しみを與へるのは憎むべき卑しい事でございます。

畫家。成程あなたは十分理屈のあるやうなお口ぶりですね。けれどもあなたのお言葉の内には奴隷の心が物を言つておりますよ。あなたは御自分を犠牲になさうとする、それが誰の爲です。それは人生の源を探ると言つて、くだらぬ骨折をしてこつこつ日を暮してゐる人間の爲ぢやありませんか。實につまらない考へだ。あなたの旦那様は寂しい死といふものに奉公してゐる人ですよ。自由の爲でもなければ、美の爲でもない、悦びの爲でもない。あの人にはあなたが犠牲になる必要がないのです。夫人。まあお靜になすつて下さい。私は犠牲といふ事など申してゐるのでありません。ですけど私にはあなたの深いお情けにおすがりする丈の動機がまだございませんもの。

畫家。あなたは僕の愛を信じて下さらないのですか。

夫人。私は自分で自分さへも信じてはゐないのでございますからね。(主人の妹登場)

畫家。あなたは何といふ冷酷な方だ。

夫人。私は正直に申上げてゐるのですよ。

妹。まあ今日は兄さん一日中邪魔されてゐたのね。

夫人。誰に。

妹。みんなによ。ばあやだの、錠前屋だの、家主だのつて。

夫人。兄さまはおこつてゐて。

妹。きつとさうよ。

夫人。やれやれ。(畫家テラアスの方に行く。)

妹。だけど姉さまだつて、ちつとも兄さんの事を構はないぢやありませんか。

夫人。あの人は私に何一つ言ひませんよ。

妹。(立ち上り)それはきつとあなただから十分言へないんですわ。(階上に行かうとする)

夫人。(やさしく)又初まつたのね。それは間違つてゐてよ。ちよいと聞いて下さいよ。(妹答へず。夫人妹の方を見て眉を聳かす。眉をひそめ、靜にテラアスに向ふ。女中食堂から登場)

女中。奥様。

夫人。何だい。

女中。奥様のお留守に獸醫のお妹さんが私の所にいらつしやいました。そ

して仰るには。(間)

夫人。(案ずるらしく)それで何と仰つたい。

女中。まるで妙な事でございますのよ。

夫人。そんなに妙な話なら、なにも聞かせておくれでない。

女中。あの方から私に仰せでございました。奥様をよく見張つてゐておくれですつて。奥様と申すのはあなた様の事でございます。

夫人。何ですつて。お前さんといふ人はしよつちう馬鹿な事を考へてゐるね。さあ、願ひだからあつちへ行つておくれ。

女中。奥様、決して馬鹿を申すのではございません、本統でございます。

「奥様を探偵してゐておくれ」と仰つて、「それからあの繪かきさんも」。

夫人。(小聲で)あつちへ行つておくれよ。

女中。私は何も悪いのではありません。それからあの方が一ルウブル下さいました。

夫人。むかうへお出で。(女中急ぎ退場)

主人。(あはただしく垂帷の後から登場)おいおい、何を大きな聲出してゐるんだい。成程又女中と喧嘩だな。あいつは全く不思議な女だよ。おかしなスカートを澤山持つてゐて、それをどこにでも引掛けておく、それで何もかも倒してゆく、何もかもぶち壊してゆくといふ女だ。ところで暫くお前と一緒にゐやうぢやないか。きつちり十分ばかりな。ひとつ頼む、茶を注いでくれ。それから畫家はこなかつたかい。

夫人。テラアスにおりましたよ。

主人。妹もあすこか。

夫人。リイザさんはお部屋ですわ。

主人。大層氣持でも悪るさうな様子だが。

夫人。少し疲れておりますの。

主人。お前の肖像畫はどの位迄いつたい。

夫人。あなたはそれを毎日お聞きになるのね。

主人。さうかねえ。あゝ畫家のお出でだ。何かおこつてゐるやうだね。どうしたんだい。

畫家。さうですか。僕はいつかお二人にお宅の庭を描いてさし上げませう。黄昏の庭といふやつを。

主人。その事で何か今時分からおこつてゐるのかい。

畫家。ところで君は上機嫌ぢやないか。

夫人。お茶でも上りますか。

主人。あつちでもこつちでも大層御機嫌の悪い日だ。僕は臺所へ行くとしやう。あすこで僕は、おい、もう一つ茶を注いでおくれ。(立ち上り退場)
畫家。いつか今にあの男はあなたをレトルトの中に押し込んで、何か酸類でもぶつかけて、あなたの反應でも書き付けますよ。

夫人。ばかな事は言ひつこなしにして下さい。もしもあなたが。

畫家。(簡潔に、心を籠めて)僕は未だ嘗てあなたに對する程の熱烈な感じを持つた事がないのです。この心が僕を苦めるのです。けれども又僕を向上させてくれます。

夫人。本統ですか。

畫家。僕はあなたに對して誰よりも秀れた偉大な群を抜いたものに成りた

いのです。

夫人。それは結構ですこと。あなたの爲にお悦び致しますわ。

畫家。奥さん、どうぞ僕を信じて下さい。

主人。(食堂から登場、テエブルに進み寄る。手に金屬製壺を持つ)ばあや、やめておくれよ。おれには料理女の世話までは出来ん。その上に亭主の事迄とは何だ。コツクでありさいすりや誰だつて好いちやないか。少しこのおれを苦めずにおいてくれよ。

夫人。ばあや、私お前に頼んだぢやないか。

主人。ばあやめ、松脂が揮發油の沈澱のやうにくつついてきやがる。(自分の部屋に行く)

夫人。旦那様のお氣に障らないやうにつて、私お前にお頼みしておいたぢ

やないかね。

乳母。奥様、失禮でございますが、お宅では一體どなたが御主人でございます。旦那様はお忙しい。リイザさんは御病氣。奥様は一日中お留守でございます。

夫人。といつて旦那様をそんな詰らない事でお邪魔してはいけませんね。乳母。その詰らない事はあなたがちやんと始末なさらなければいけないぢやございませんか。さうではございませんか。

夫人。それでも私はお前さんに十分教えて貰ふ積りでゐるのですよ。

乳母。何をお教え申すのでございます。お家の中は何もかも投げやりになすつたまま、旦那様の事はどなたもお構ひになりません、かういふ有様を拜見致しますと。

夫人。(やさしく) どうぞ願ひだから今は向ふへ行つておくれな。

乳母。よろしうございます。おなくなり遊ばした總督の奥様は、決して私を部屋の外へ追ひ出したりなさいませんでしたよ。(惱ましげな様子、退場)

夫人。(立ち上り神経質らしく室内をあちこち歩む。畫家笑ひ乍ら眺む)之がおかしう御座いますか。

畫家。ばかばかしい事といふと決まつて面白いものです。(感情的に) あなたはこの家をお出にならなければいけません。あなたはもつと美しい自由な生活の爲に造られた方です。

夫人。(案ずるらしく) こんなどつち向いても亂暴な人間に取り囲まれてゐるやうな生活が、一體有り得るのかしら。不思議な事に價值のある人に

成ればなる程つまらない者に煩はされてゐる。まるで高い建物の壁にこみが風に吹き付けられるやうに。(主人登場、がっかりして色蒼ざめてゐる。その顔には子供らしい哀願するやうな心持が明に現れてゐる。聲も低く、恰も自分の罪を知るやうに) あなた、どうなすつたの。

主人。とうとう熔解しちまつたんだ。いいかい、熔解しちまつたんだ。實驗は十分注意してやつたんだがなあ、何一つ手落ちはないんだ。(夫人を見る。けれども何も目に入らない様子、テェブルに進み寄り、腰を下す。神経質らしく指を動かす。隠しから手帖を取出し手早く鉛筆で何か書き込んで考へ込む。畫家は夫人と握手して退場)

夫人。(小聲で) あなた。(稍聲高に) あのあなた、そんなにお困りなの。主人。(齒の間より) 待つてくれ。なぜ熔解したんだらう。(幕)

二 幕 目

上手家の壁と手すりのある幅の広いテラアス。手すりの處々壊れてゐる。テラアスの上にテーブル二つ、大きな食卓と小さな食卓と。小さなテーブルの上には骸子と賭遊びの骨牌、テラアスの脊面は麻の日除けで覆はる。中庭に沿ふて悉く緑色な古い四つ目垣を見る。その垣の後は庭である。テラアスの隅から獸醫と家主と登場。

家主。では何でもございませんな、すぐ癒つてしまひますんで。

獸醫。何でもありませんよ。

家主。それで有難い。何にしてもけちな馬で大して好いもんぢやない癖に

無暗と金を食ひましてな、七年前には六十ルウブルはたかせられ、それ以來ばかりで燕麥を食ひますんで。療治をしても無駄になるやうでござんすなら、どうぞさう仰つて下さいまし、手前はその位なら賣拂してしまふ覺悟なんで。

獸醫。するとかう考へるんですか、他人の所ならあの馬も丈夫に育つとでもさう。

家主。それは手前の知つた事ではございませぬ。實は先生。

獸醫。何です。

家主。實は少々先生に御面倒な願ひがあるんでございませぬが、さあ何と申上げてよいものやら分りませぬので。

獸醫。(煙草をふかし初めて) 簡単にいふと何です。

家主。へえ、實は。ほんのちよいとしたお願ひで、へえ。

獸醫。早いところを。

家主。實は御當家の御主人に關係したお話なのでございます。

獸醫。へえ、それで。

家主。手前の悴で商工學校を卒業した者が一人ございまして、之の申しますには、當今は化學が大層な進歩ださうでございます。そこで考へますには、手水石鹼、香水の類、香油からその外之の類のものは中々よく賣れまして、ばかにならない儲口だと存じたのでございます。

獸醫。そこで一口に言ふと。(家主の悴隅から覗く。獸醫目にとめる)

家主。さうは参りません。手前の計畫は中々遠大でございまして。それから酢、又例へば各種の素もとと申しますものでございますな。猶その外にい

ろいろ御座いますな。ところでこのお邸の旦那はと申しますと、時間を潰し材料を使つて、さつぱり成績が上りません。もう近い内にはすつかり参つておしまひになる事と手前は存じております。そこで手前は先生からこの旦那へ一口を利いて頂いてと考へましたんで。

獸醫。酢の事をですか。

家主。いえ、一般のお話でございます。先生に特に力を入れて仰つて頂きたいのは、もう間もなくこの旦那もお金の方が思ふやうに行くまいといふ點でございます。そこで手前が一つちよいとした仕事の御相談に乗つて頂かうといふ寸法でしてな。それは手前の方で小さい工場を建てて差上げる、旦那の方では必要の品物をそこで製造する、仕事に持ち出す金が御不足なら、手前は手形を頂戴しておくといふ……。

獸醫。(微笑)へえ、中々君も親切者ですね。

家主。手前は之で中々心は優しい御座います。よそのお方がつまらなく無駄骨折つてお出でだと見ますと、どうにかしてお爲になるやうに機會を造つて上げたいと考へております。第一この旦那はお豪い方なんで、いつか奥様のお誕生日に花火をお拵へでしたが、全くどうして御器用なもんでしたよ。では先生から一つお話願へませうか。(女中テラアスの上に現れ茶道具を置く)

獸醫。話しておきませう。

家主。それでこそ先生は旦那をお助けなさいますやうなもんで。ではひとまづ。いづれ又お目に掛ります。

獸醫。失敬。(女中に)皆さんはどこにお出でだね。

女中。旦那様はお部屋でございます。奥様はお庭で、繪かきの方と御一緒に。リイザさんもお庭でございます。

獸醫。ぢや僕も庭にゆくとしやう。

家主の悴。(隅から急に現れ)御免下さいまし、お名前を失禮ながら存じませんで。

獸醫。僕も君のお名前は知りませんが。

家主の悴。ミヒヤエル、ナザロフ、キグルソフと申します者で、先生のお召使で。

獸醫。お召使ですつて。僕は別に君から。

家主の悴。(頗る恭順の様子)之はなに、唯丁寧に左様申しましたんで。實は偶然先生と私のおやぢとのお話を傍で伺つてしまひました。

獸醫。僕はその偶然の證人でせう。君は何だつてそんなに足をぶるぶるさせてゐるのです。

家主の悴。いえ之は、つい早く早くと思ひますので、私は至つてせつちちでございます。

獸醫。ところで。

家主の悴。へえ、何と仰います。私は之で非常に元氣者でして、一體……。

獸醫。いや分りました。失敬しますよ。

家主の悴。ちよいと申上げたい事が御座いますんで。

獸醫。何です。

家主の悴。父の申上げた事に就きまして實は。あの計畫は私の考へました事なんで、父はまだ十分先生に御説明申上げなかつたやうでございます

ので。

獸醫。結構です、よくのみ込んでゐますから。

家主の悴。如何でせう、今夕九時にトロイツカ通りの巴里料理店で一杯差上げたいと存じますが。

獸醫。いやそれはお受けが出来ません。

家主の悴。それは残念でございますなあ。

獸醫。(ほつとして)まことに残念で。(庭に行く。)

家主の悴。(輕蔑の眼で見送り)田舎者め、けだもの醫者に違ひないて。

女中。それ御覽。あの方はお前なんぞと話なんかさらないんだよ。

家主の悴。おい、おれがお前にしてやらうと思つてゐる事分つてゐるか。

女中。知るもんかね。

家主の悴。まあ聞けよ。いつかお前にやつた指輪は、あれはお前がおれの所から盗んだものだといふ證據が上げられるんだ。警察の副署長はおれの懇意だからな。

女中。そんな事ぢやびくともしないよ。あの副署長さんはこの私にぞつこん惚れてるんだからね。

家主の悴。だから猶悪いといふ事さ。まあそれは冗談だ。お互に眞劍に話さうや。家が附いて二十五ルウブル、どうだ承知か。

女中。向ふへ行つておくれ、私はそんな商賣をするぢやないよ。

家主の悴。だがばかさ。ばかでなくて何だ。まあちよいと聞くが好い。おれの友達にね、ソチコフといふ男だが好い男で金があるといふ代物だ。ひとつお前を近付きにしてやらうか。

女中。遅い、遅い。あの人からはもう二度も手紙を貰つたよ。

家主の悴。(腹立たしげに) 嘘ぢやないな。畜生め。してみるとどこにも同じ奴がゐるわい。ひどい事をしやがる。ともかくお前さんは別嬪だね。

このおれが金持の嫁さんを貰ふ所でなければ、お前を女房にするんだがなあ。

女中。(囁く) みんなが来たよ。

妹。(庭から獸醫と共に登場。家主の悴に向ひ) 何か用ですか。

家主の悴。實はお宅のお女中さんに薬の水を窓から庭へお捨て下さらんやう、特と御注意申しました處で。その下の庭の植木が酷い目に會つております。それに今の處危険でございます。コレラがはやつて參つたと申しますので。そんな事お耳にはまだ入りませんでございますか。

獸醫。君失敬しますよ。

家主の悴。御免下さい。(急いで退場)

妹。(テラアスの上に昇り) 厚かましい人だこと。

獸醫。この先生は生物を造らうといふ意思ださうですね。ところで其れが何の役に立つのでせう。そんな生きた物なら此處にだづてあるぢやありませんか。又一體どんな生物を。まあ例へばこの僕だづて生きた物です。それでどんな意味が僕の體にあるといへませう。

妹。あなた今日は御機嫌が悪いのね。さあお出でなさいよ。一勝負しませう。ここへお腰かけなさいまし、私の手は六と二十三よ。(賭勝負する)

獸醫。僕のところは十と二十九。

妹。私にはあなたが分りませんわ。八、三十一。お體だづてお丈夫なくせ

に。

獸醫。七に三十六ですよ。

妹。何にも興味といふものをなくしておしまひだし、それに何もなさらないのですもの。五、三十六よ。今の世の中の生活はこんなに悲劇的な色に成つて、何處でもお互に人を憎み合つて、愛といふものはぽつちりだつてありやしませんわ。

獸醫。三十六ですか、では十と四十一。

妹。あなたなんぞお働きさへなされば、いくらでもそのお心持を癒せたんでございますわ、正しい立派なお仕事をなされば。私のところは八と二十四よ。

獸醫。だが僕ももう四十の坂を越えた體ですからね。では七と、それから

四十八。

妹。四十ですつて、まあばからしい。十、五十四。

獸醫。それに貴女は僕に習慣をおつけなさいましたからね。三、五十と一。妹。おや私が。私があなたに悪い習慣をおつけしたんですつて。

獸醫。さうです、あなた方皆さんです。御主人といひ、奥さんといひ、それからあなたといひ。

妹。八。私上つてよ。もう一番しませうか。だけど大きな聲で勘定するのはおよしなさいよ。話の邪魔になりますからね。それよりも私に仰つて下さい、何で私達があなたに悪い習慣をつけたといふのでせう。

獸醫。僕はあなたとお近付きになる前には、非常な好奇心を以つて生活してゐた譯です。

妹。興味を以てですか。

獸醫。まづ好奇心です。僕は一切を知らうと思ひました。新刊の書物を読む場合には、表装の外に何か新しい處はないかと思つて讀みました。往來で男が撲たれてゐると、僕は立止つてその男がもつと撲たれるかどうかと見てゐたものです。そればかりではありません、僕はよくそのぶち合の原因を尋ねました。獸醫學校へ入つたのも、非常な好奇心を抱いて來たやうな始末です。

乳母。(扉の内に現れ) お嬢さま、滴劑を召上りましたか。

妹。(氣短に) ああ、あ。

乳母。湯沸しがもう煮立つてゐて、どなたもお茶にゐらつしやりやしない。ほんとに、ほんとに。(庭へ行く)

獸醫。僕は何事をも好奇心で追求したのです。そしてかういふ判断に到達しました。人生の組織は實に悪い、人間は貪婪で愚劣なものだ、然し僕はいくらかましで賢くもあるといふ断定です。この自覺は僕にとつて愉快でしたよ。そして心も落付いてきました。例へば馬よりも重さうに生活の重荷を脊負はされてゐる人間を見ても、又は僕が療治をした犬よりももつと酷い有様の人間がゐても、それが人間は犬や馬よりも劣つたものだといふ考で解決が出来ましたよ。

妹。どうしてそんな風な事が仰れるのでせう。あなたは御自分で仰つてゐる事を信じてゐらつしやらないのでせう。

獸醫。僕はそんな風に生活をして、ちつとも悪いとも感じませんでしたよ。けれどもその後この家へ入り込んで眺めてみると、こつちの方では研究、

研究で死なんばかりの有様だし、こつちの方では赤だ黄色だと繪の具の謔言ときてゐる。その中でたつた一人の女の方丈が楽しい聰明な生活をなさらうとする。そのあなたが然し深い所ばかり見つめてゐて、あなたの魂の中に悲劇を抱いてゐらつしやるぢやありませんか。

妹。けれど私どもがあなたに悪い習慣をつけたといふのは何でございませう。さあ私の分取りましてよ。

獸醫。それは申されません。初めの内は僕はあなたが好きで好きで、その爲にはブランデーをやめた位です。あなたとお話をしてゐて、それで酔つたやうな心持になる事は、譯もなかつたのです。けれどもその後、僕はこの好奇心といふやつを無くなして、次第にいらいらした心持になつてしまひました。

乳母、(庭から登場) お茶をお上りになりますなら。

主人。(居間から 大声で言ひ乍ら登場) サモワルは好いかい。そいつは豪氣だ。いや之は失敬。

獸醫。今日は。

主人。姉さんは庭かい。

妹。ええ。

主人。呼びに行つてこやう。君はこの勝負はまけるぜ。

獸醫。では一つ負けるかな。

主人。リイザ、お前今日は大層好い顔色ぢやないか。目なんぞもはつきりして、落付いてゐて。それが何よりだ。(庭へ行く。)

妹。(腹立たしげに) あの人はどうしていつも私に物を言ふのに、まるで

病氣の子供にでもいふ調子なんでせう。

獸醫。原形質といふものに興味のない人は、誰だつてあの人に會つちや子供ですよ。

妹。私には誰でもみんなそんな調子で話すのですよ。私の病氣だといふ事をわざと思ひ出さすやうになさるんですよ。

獸醫。第一番にあなたからそんな事を忘れておしまひなさい。

妹。さあそのお話の續きは。あなたはいらいらした心持になると仰いましたね。なぜでございます。

獸醫。ええ、いらいらしましたとも。本統に堪らなかつたのです。まるで魂の機關が急に錆びついてしまつたやうでした。僕はもう本統にばかりなつてしまつたんです。リイザさん、あなたが僕を助けて下さらなければ

ば。

妹。もうそんな事は仰らないで下さい。私はこんなに弱い女です、かたは者です。

獸醫。(靜に) それでは僕ももう滅びる時なんでせう、あのかぶと虫のやうに。

妹。(飛び上り) もうやめて下さいまし。あなたは私をお苦しめなさいます。それがお分りになりませんの。

獸醫。(愕然として) え、え、余計な事でした。氣を悪くしないで下さい。もう二度とは申しませんから。もう黙りますからね、御安心下さいまし。

妹。まあそんなに仰らないで下さい。私はあなた方にそれは御同情申して

ゐるんですよ。あなたのその力の無い御様子は、そして何だか影が薄くなつて。(間)

獸醫。僕も昔は好く眠れたもんです。ところが今は、今は横に成つても目がぱつちり開いて、まるで年の若い戀をしてゐる學生のやうに夢を見るのです。僕は今何か仕遂げたいのです、何かかう雄大な英雄らしい仕事です。ところが何をしてもよいかそれがさつぱり浮んで来ません。そしてひよいとこんな氣がするのです。ある流れに氷の塊が流れてゆきます。その氷の上に豚の子が載つてゐます。可哀しい蔷薇色の子どもで、にくい鳴いてゐます。すると僕がそこへ猛進してゆく、水の中へ飛び込む、豚の子を救ふとします、ところがどうでせう、その小豚は誰にも役に立たず、結局僕がたつた一人で海わさびで養つてやらなければならぬの

です、その僕の助けた豚の子をです。

妹。(笑つて) まあおもしろいこと。

獣醫。全く涙が出ます、おかしくて。(庭から夫人、主人、畫家登場)

妹。お茶を注ぎませうか。

獣醫。どうぞ。ねえ、リイザさん、あなたは僕とやつぱり結婚をすればよかつたのでせうね、さうすれば二人で競争で溜息をついてゐたでせう。

妹。(不快げに) 大層冗談仰るのね、いつものやうでもなく、いやらしい事を。

獣醫。(靜に) ともかく一つ考へて見て下さい、一體私らはどうすればよいのでせう、あなたと僕とは。

妹。(愕いて) もう黙つて下さい、黙つて下さい。

夫人。(畫家に) え、それは結構ですけれど、深刻な思想でもなし、又誰にも分るといふものでもありませんね。

畫家。藝術は單に擇ばれたる者のみの爲に存在してゐるのです。それが藝術の誇りです。

夫人。それは、藝術の悲劇ですわ。

畫家。多數者の見解がそれなんです。僕は全然その御主意には反對ですよ。

夫人。まあえらい權幕ね。藝術の任務は人を徳化するにあると思ひますわ。

畫家。藝術に目的なんかあるもんですか。

主人。おい君、世の中に目的のないものはないぜ。

獣醫。もしこの全世界が目的のないものぢやないとすると。

妹。あゝ、もうそんな事私何遍伺つたか分りませんわ。

夫人。本統にワギンさん、人生といふものは辛いものです。なんぞといふと人は生活に疲れてしまひます、人生はずい分亂暴なものです。どこへ行つたら人間の魂が安まるのでせう。美といふものなぞはごく稀にあるものです。けれども何か本統に美しいものがあるとすると、私の心は晴ればれ致しますわ、丁度お日様が曇つた日を照すやうにね。全く美といふものは誰でも之を理解して愛さなければいけません。さうすれば人間も美といふものを道徳の基礎にするでせう。行ひの美といひ醜といふのも、みんなその價值を決めてしまつて、世の中はすべてどこもかも美しいものになるでせう。

主人。成程、立派な説だ。それは出来得る事だからな。

畫家。僕はそんな、人間がどうなつたつて構やせん。自分の歌を大きな聲

を出して一人で唄ふばかりですよ。

夫人。もうもう澤山。あなたの仰る事は。藝術の中には人間の衝動が廣さにも高さにも現れてゐなければいけませんわ。藝術家がこの衝動に支配されて、太陽のやうな美の力を信じた時にこそ、私はこの繪も著書もソネットも初めて理解が出来ます、又尊くも感じられるのです。藝術家は私の魂を感じ易い、調子の好いものにしてくれます。疲れた時は私を休ませてくれます。労働や幸福や生活の樂みを與へてくれます。

主人。これはおもしろい。

夫人。私はよく胸の内に一枚の繪を想像してみますの。涯もない大海の真中に船が一艘浮んでおります。それが捲き返す青い波にもまれもまれております。その軸先には強い嚴丈さうな男が大勢立つております。その

人達は晴れやかな精力のみなぎつた顔をして、平氣な風で立つております。りりしい笑を含んだ様子で、遠い遠い彼方を眺め、靜に目的地に向ふ航路を進んでゆかうとしております。まづこんな繪なので御座いますね。

畫家。そいつは變つてゐますね、成程。

主人。一寸お待ちよ。

夫人。もうそんな人達が耀く太陽の下で、砂漠の黄色い砂の上を歩くと。

妹。(思はず小聲で) その砂は赤うございますよ。

夫人。そんな事はどうでもいゝんですよ。つまりその人達が男らしい、しつかりした、堅い決斷を持つたやうな頼もしい人であればですよ、つまり一口で言つてみればすべての偉大なもののやうに單純なんです。さ

ういふ繪を見ればそこに描いてある人間や、又それを描いた畫家を私は崇拜いたしますわ。そればかりではありません、私等を動物の世界から離して、益々人間の世界に近付けてくれる大きな人格を憶はせますわ。畫家。いや、分りました。おもしろい。立派なお考へだ。(テラアスからヤコブ、トロシン登場、立止り口を開いてゐる。まだ誰にも氣付かれない。) 僕も一つそんな繪を描いてみるか。ばかばかしい。

主人。君、無論だ、ぜひ描いてみたまへ、ヘレナ、お前は豪氣な女だ、お前からそんな新しい事を聞かうとは思つてゐなかつたよ。全くだよ。夫人。あなたにそんな新しいとか古いとかお分りですか。

トロシン。皆さん方。(一同振り向く) 皆様のおもしろさうなお話のすみませぬのを、かうして待つておりました。ところで一寸お邪魔させて頂きた

う御座います。なに、ほんの一寸で。

獸醫。何です、用事は。

トロシン。お見受けする所小露西亞御出身ですな。なにすぐ分ります。私自身すでに小露西亞に居りましたんで、笛も吹けますので。

獸醫。何が一體御用ですかい。

トロシン。之は失禮、お話は順々に申し上げます所で。まづ手前の名前からお聞きに入れますと、下士ヤコブ、トロシン、ログ驛の前助役でございます。そもそもこのトロシンには家内も子供も鐵道に轢かれてしまひまして、只今はがき共が残っております丈で、女房はございません。そこで一つお願いがございますんで。

主人。酔つばらひといふ奴はおもしろい事を言ふなあ。

妹。(たしなめる如く) 兄さま、何仰るの。

夫人。どんな御用ですか。

トロシン。(お辭儀をして) 奥様、失禮でございますが(とスリツパをくつつけたやうな足を指さし) この通り長靴は持たず、全く幸ひはうつろひ易しでございますな。ところで奥様、錠前屋のエゴルめは何處に住んでおります。エゴル何とか申しましたな、姓の方をとんと忘却いたしました。多分あいつも家族なんぞ持つてはおりますまい。それから多分あいつは。多分家族なんぞは夢に見た丈でございますせう。

夫人。錠前屋はそこですよ、長屋の、一階下の。

トロシン。メルシイ。私は一日中あいつを探しました。もうひどくへたばりまして、立つてはゐられません。あの隅でございましたな。どれ行つ

て参りませうか。あいつとは實は昨晚初めて近付になつたんでございまして、もう之から押しかけて参るのでございませう。有難く思ふがいゝや。隅つこの家でございませうな、譯なし、譯なし、それでは御免を蒙ります。

主人。おもしろい奴だ、長靴は持たず、だなんていやがる、みんなどう思ふね。

妹。あなた、聞えますよ。

トロシン。(よろめき乍ら遠ざかり、髭の中にて呟く。)おやく、あいつらはおれをゼロの人間だと思つてゐやがる。之れでもヤコブのトロシンだ。ちやんと禮儀作法は御承知なんだ。譯なし、譯なし、なに、ヤコブ、トロシンだと。(退場)

主人。實に滑稽なやつぢやないか。

妹。姉さん、あんなやうな男もあなたの繪の中には入りますの。

夫人。繪になぞなるものですか。

主人。あんな人間は船へしつかりくつ付いてゐる海草か貝のやうなものです。

畫家。そして船の運動を妨害する。

妹。それではあゝいふ人達の運命は滅亡といふものでせうか。墮落のどん

底へ軀を投げ込んで行つて、救ふ道のないものでせうか。

夫人。あゝいふ人間はもう滅亡してゐるんですよ。

畫家。僕等だつて眞暗な混亂した人生の中におて、たつた一人ぼつちですよ。

主人。君、あの連中はいはゞこの社會といふ有機體で無感覺になつた大部
分さ。

妹。まあ皆さんはどうしてそんなに残酷なんでせうか。私伺つてはゐられ
ませんわ。そんな残酷な盲目なお話を。(庭に向ふ。獸醫靜に立つて之に
従ふ。)

主人。いゝかい、妹の前ぢや何にもしやべるのではないよ。人の言ふ事と
なると何でもあの子の病的な氣に障るのだからね。

夫人。ほんにリイザさんのお氣に召すやうにするのは一骨だわ。かうして
生きてゐ乍らこの生活が怖いといふのですからね。

畫家。奥さん、僕はそのあなたの船の舳先へはたつた一人の男を立たせた
いのです。その男は陸の上へあらゆる希望を葬つてきたといふ顔をして

ゐるのです。然しその目には強烈な意思の力の炎が燃えてゐます。さう
して寂しい人として、新しい希望の目を醒すために乗り出したといふ男
です。

主人。だが暴風雨ぢやまづいな。それとも。いや暴風雨でも構はん。然し
船には正面から太陽が射してゐなければいかん。お前のその繪の題は『太
陽に向ひて』とするが、いゝぜ。つまり人生の源に向つてといふ意味だ。
畫家。成程、人生の源に向ひてか。それから遠い向ふの雲の間から、太陽
のやうに女の顔が耀いてゐるのですね。

主人。何だい、そんな女の顔なんか。それより船の上の人間の真中へは、
ラフホアジイルとかダアキンとかいつた人間を描くんだ。それは好いが
飛んだおしやべりをしたわい。どれ行くとしやう。(退場)

畫家。(熱情的に)奥さん、あなたは一日増に僕を力強くお傍へ引寄せて、しつかりあなたのお體へ結び付けておしまひになるのですね。僕はあなたをお慕ひ申してゐるんです。

主人。(居間から)君、頼みがあるんだ、ちよいと。

夫人。決してそんな繪なんぞお描き下すつては困りますよ、またそれに類したものでも。

畫家。僕は一枚描きます、そしてあなたに御覽に入れませう。その色彩は自由と美の爲に崇嚴な讚嘆の歌をうたふんです。

主人。おい、君。

夫人。あなた、行つてやつて下さいまし。(畫家退場、夫人は物を案ずるらしくテラスの上をあちこちと歩む。庭から獸醫の聲がする。)

獸醫。(しづかに)決して別人ぢやないんです。唯物を言つてゐる間は人間で、行ふ所は動物なんです。

妹。(憂ひの様子)本統にいつの事やら。(その後の臺詞聞えず)

寡婦。(庭から登場)あら、奥さん、お内でしたの。

夫人。(冷淡に)どうしてそんなにびつくりなさいますの。

寡婦。あら、どうしてつて。御機嫌よう。

夫人。失禮でございますけど、御挨拶致します前に。

寡婦。ぢや、何か。

夫人。少々お尋ねが致したう御座います。お互にはつきりと本統の事をお話致ませう。あなたは宅の女中に心付を下さいましたね。

寡婦。(早い語調で)まあひどい。あの女は私に裏切りをして。

夫人。と申しますと本統なので御座いますね。メラニイさん、あなたのさういふ爲され方を何と世間が申すか御存知で御座いますね。

寡婦。はい、存じておりますよ、よく心得ております。然しお聞き下さいましよ、あなただつて御婦人でせう、あなたも戀をなさいませう、ですからきつとお分りでせうが。

夫人。もつとお小さい聲で。あなたのお兄様が庭にお出ですよ。

寡婦。そんな事が何の苦になりませう。では申し上げますが、私はあなたの旦那様をお慕ひしておりますの。さあお分りでせう。お懐しく思ふ餘りには、せめてお勝手の御仕事なりお女中なりに成つても、お傍に参りたいので御座います。あなたも戀を爲すつてゐらつしやるのでせう、私のお見受けした所ではあの繪かきさんに。さいすればあの旦那様はあなたに

御用がないのぢや御座いせんか。奥様、私あなたの前に膝をついてお願いしたう御座います。どうぞあなたの旦那様を私に下さいまし、私はあなたのおみ足を接吻したう御座います。

夫人。(びつくりして) 何を仰るのです。何といふ事です。

寡婦。いつそかうしてもよろしう御座います。私はお金を持つておりますので、それで旦那様に實驗室を建てて、それから立派なお住ひを拵へて上げたう御座います。毎日のお世話は私がして差上げます。そよ風もお體には觸らせませぬ。晝も夜もお部屋の入口の前に腰をかけております。私はそれがしたいので御座います。あなたにはあの旦那様はもう何でもないので御座いませう。その旦那様が私には神様のやうにお懐しいので御座います。

夫人。少し落付いて下さいましよ、私にはさつぱりあなたの仰る事が分り兼ねますわ。

寡婦。奥様、あなたは賢い、立派な、世の中の苦しみを御存知ないお方で御座いませう。私はけれども私はさんざんこの世の中を苦しみ抜いて参りました。數限りない災難を辛抱して、近付きと言つては悪黨ばかりで御座います。そこへあのお方が、まるで子供のやうなあのお方が、あの立派な旦那様にお目にかかりました。私はそのお傍に女王のやうになつて居りたう御座います。勿論あのお方には奴隷で、よそに向つて丈女王なので御座います。さうすれば私の魂は、私の魂はやつと息をついて清い清い人間に成るので御座います。私の心の中がお分り下さいましたか。

夫人。(感動したる様子)あなたのお心をお察しするのは私には辛い辛い事

なのですよ。お互にもつと打明けてお話しなければいけませんね。本統にあなたはお氣の毒な方ですわ。

寡婦。ええ、ええ、もう私といふ者がお分りで御座いませう、お分りになつて頂かなければいけませんわ。それで私も此様に申上げるんですわ。思つてゐる事は何もかも申し上げます。きつと私を理解して頂けませう、私をお瞞しにはなりませんでせう。もしあなたが私をお瞞しにならなければ、私だつてやつぱり人間で御座いますからね。

夫人。どうしてあなたを瞞すなんて。私にはあなたのお苦しみがよく分つております。さあここへ行らつしやい。一緒に歩いてきませう。

寡婦。ええ、ではあなたも好い方になつて下さつて。

夫人。(寡婦の手を執り)私を信じて下さいね、誰も正直であればお互の心

はよく理解されますわ。

寡婦。(夫人の後に従ふ)あなたをお信じ申してよいか悪いかは存じませんけれど、あなたのお言葉はよく呑み込めますわ、けれどあなたのお心持は分りませんわ。あなたは好い方ですかしら、それとも悪い方ですかしら、私は何か善いと思はれる事を信じる丈の勇気が御座いませぬ。私は今迄に善い事を見た験がないのですもの。私自身が悪い罪の深い人間で御座います。私の魂は涙の海に浸つておりました。その魂は今でもまだ眞黒なので御座います。(兩人退場。門番手に斧を持つて隅から現れる。庭から妹と獣醫と登場、家からは乳母現れる)

乳母。ほら、ほら、みんなてんでに逃げておしまひだ。れではまるで半氣違でも相手になさるやうなお仕打だ。お嬢様、何をさういつでもふさ

いでゐらつしやいますの、まあ腰をお掛けなさいまし。

妹。構はないでおくれよ。

乳母。おおこりになつてはいけませんよ、お弱いお體なんですからね。(咳き乍ら家の中に入る)

獣醫。實際人の好いよく氣のつくばあさんだ。本統にあなたを非常に愛してゐるのでせう。

妹。全く風變りなんですよ。曲つた事が大嫌ひなんで御座います。もう宅にも三十年以上居りますんで、ひどい頑固で御座いますね、随分之で宅でも長い間音楽をやりましたり、いろいろ深い思想のお話が出たりしましたもね、今だにさつぱり利巧にも物が分るやうにもなりませんのですよ。

主人。(畫家と共に室内から登場。畫家に)それは君全く、化學的方法で手を加へた木繊維の紡績が出来る位に進歩してくりや、樺の木の手ヨツキや白樺の上衣を着るやうに我々はなるのさ。

畫家。例の木製の空想は御免蒙るよ。おもしろくもない。

主人。おもしろくないといふのは君丈だ。

獸醫。この日傘は僕の妹のものだ。ねえ君、昨日妹が僕にかう聞いたぜ、假設の理論といふものは原子とどういふ関係があるかなんて。それだから僕は原子といふものは假設の理論の孫娘だつて答へておいたぜ。

主人。(笑ひ乍ら)何だつてそんな返事をしたんだ。あの方は全く無邪氣なんだよ。そして何事によらず非常に興味をお持ちなんだ。

獸醫。無邪氣だつていふのかい、ところでアミイバにしる顯微鏡蟲にしる、

みんな科學が偽造した子供さ。間違つてゐるかね。僕は血統學なんてものをめちやめちやにしてやつたんだ。

妹。あなたがお妹さんになさるお仕打を見てゐても、人間といふものがお互にどんなに残酷に悪意を持つてゐるかよく分りますことね。

獸醫。それがどが悪いんです。

妹。(神經的に)慥にかうでございます。世の中には人を憎む考が段々多くなるばかりで、この世界はあらゆる残酷の血だらけの町でございます。主人。リイザ、お前は又黒い羽根を擴げるのかね。

妹。黙つてゐらつしやい、兄さんには、にも分りません、唯顯微鏡ばかりみてゐて。

獸醫。それからあなたは望遠鏡ですかね。ぢかに目で見る方が餘程よささ

うですがね。

妹。(病的に感傷の様子)あなた方はみんなお目くらさんです。もつとお目をお開けなさいまし。あなた方の生活を満してゐるものや思想や感情は荒れ果てて腐れ切つた森の中の花のやうなものです。あなた方なんぞこの世の中に存在を認められてやしないぢやありませんか。

畫家。(冷淡に)ではあなたには何がこの世の中でお目にとまりました。

妹。私はこの世の中に數百萬の人間を見ております。數百位の人間を問題にしてはおりません。しかもその數百萬の人の中に憎み合ふ心が大きくなっております。あなた方は美しい言葉や思想に酔はされて、それを御覽に成らないのです。けれど私は町を歩いておりますと、憎み合ふ心が至る所にあつて、人間が勝手に暴れ狂ひ乍らお互に殺し合つて楽しんでゐる

のがよく目に映るのですよ。あなた方もいつかその罰をお受けになります。

主人。お前がそんなに怖がるのは、こんな風に天氣が悪く成りさうで、蒸暑いもんだから、お前の神経が。

妹。(哀願するやうに)どうぞ私の病氣なんぞかれこれ仰つて下さいますな。

主人。では聞くが全體誰がこのおれだの何だのを憎むといふのだい。

妹。誰だと仰るの。それはあなた方が御自分の遠い遠い後へ棄てておらしつた人達ですわ。

畫家。(昂奮して)何だばかばかしいそれなら僕等はそんな人間の爲に後戻りをしてやるもんですかい。

妹。その人達はどうしてあなた方を憎むのでせう。それはあなた方がさういふ人達を遠ざけたからです。さういふ人達の人間としての価値もないやうな辛い生活に、ちつとも同情をなさないからです、あなた方がおいしい物を召上り、立派な物を體に着けてゐらつしやるからです。憎みといふものはめくらで御座います。然しあなた方が明るい所にお出でなのですから、憎みといふものにもあなた方が見えるのです。

畫家。あなたはまるでカサンドラといふ役割ですね。

主人。(激して) まあ君はいいよ、いいよ。(妹に) お前は大間違を言つてゐるぜ。おれ達はこの體を重大なものに捧げてゐるのだ。その重大なものといふのは、この人生の美さを豊富にするものなのだ。おれはその秘密を研究してゐる。お前の所謂後に残したといふ連中も、今におれ達の

仕事に分つてくるだらう。さうすればおれ達の仕事を尊敬するやうに成る。

畫家。そいつ等が尊敬しやうとしまいと、僕は一切お構ひなしだ。

主人。そんなに輕蔑して人を見下すもんじゃないよ。さういふ人間も君の考へてゐるよりはちつとは好い、理解もある。

妹。兄さんは何にも御存知ありやしないわ。

主人。そんな事はない、おれには好く分つてゐる。(と初めると夫人と寡婦とはひどく昂奮した様子でテラアスに行く。)おれはこの人生が繁榮し發展してゆく様を見てゐるのだ。その人生がおれの精神の撓まぬ研究に屈服して遂にこの目の前に深い不思議な秘密を曝露してくるのを見てゐるのだ。今にこの人間が一切の物を支配する王者になる。一切の生れてく

るものがもつと調和を得てくる。人間は人生に對し又自己に對して持つてゐる要求を次第に高めてくる。嘗ては目にも見えなかつた形のない一塊の蛋白が、太陽の光に温められて生命を得てくるのだ。それが次第に數を殖やしてくると、その蛋白から鷲が生れる、獅子も人間も生れてくる。やがては我々人間から、あらゆる人間の間から一の犯すべからざる有機體が生れる時がくるのだ。諸君、それが眞の人類です、その有機體の個々の細胞である人間は、この思想即ち我々の仕事の偉大なる業績の歴史をやがて持つやうに成るのです。諸君、現在はこの仕事に對する樂みを持つて、自由に共に働くのです。然し未來は立派なものです、僕はこの未來がもう近付いてゐるやうに思つてゐます。この未來が僕の目には見えます。人類が生長し成熟する。これが人生だ。これが人生の意義だ。

妹。(壓せられる心持で) 私本統に出来る事ならあなたの仰る事を信じたいと思ひますわ。(隠しから手帳を取り出し手早く何か書き込む。寡婦はうつとりして滑稽な印象を與へる位に主人を見つめる、夫人も初めは暗い顔をしてゐたのが憂鬱な微笑を浮べる。畫家は熱心に傾聴してゐる。獸醫は頭を卓上に打伏し顔は見えない。)

畫家。僕は君を寧ろ詩人だと思ふね。

主人。唯死を恐れる心がある。人類が大膽に明快に自由であることを妨害するものは之だ。この恐怖心が人間の頭の上に重い黒い雲のやうにはびこり、憂鬱な影をつくつて地面を覆ひかくし、それで幽靈が生れるのです。この不安が人間を自由の道から遠ざけ、經驗の大道から迷はせるものです。人生の意義に早まつた憎むべき憶測を加へたのは、この感情の罪だ。

理性を脅し迷信を生ませたのもこの罪だ。然し我々は、この我々人間は、太陽の子は、この光ある人生の源に芽を萌して、太陽に由つて産み出された我々は、黒い死を怖れる心なんぞ取つて捨てなければいけません。我々は太陽の子だ。太陽は我々の血潮の中に燃えてゐる。太陽は我々の疑惑の闇を輝かす。太陽は精力のおほ海だ。美のおほ海だ。魂を酔はせる悦びのおほ海だ。

妹。(飛び上り) 兄様、本統に立派なお言葉ですこと。太陽の子。私もその一人なのでせうか。私も太陽の子なのでせうか。兄様、本統に私もさうなんでせうか。

主人。さうだ、さうだ、お前も太陽の子だ。それからすべての人間も。無論さうだ。

妹。まあさうでせうか、ああうれしい、何とも口に言へない程私うれしいわ。太陽の子。けれども私の魂はもう散々に引裂かれてゐますわ。あの一寸皆様に聞いて頂けるかしら。(次の詩を口ずさむ、初めは目を閉ぢて)

空高く耀く翼に

王なる鷺は天馳りゆく

わがあそこがれのかの高山に

我も亦飛びゆかましを。

飛ばんとすれど甲斐なし

我は地上の囚はれ人

この世の塵にひたほみれて

わが魂は空しく躍る。

我は爾の紅の夢を愛す

又正義の爲の大膽なる闘ひを

されども荒れ果てし洞には

盲なるもぐらの族あるを知れり。

思想の樂さも又

太陽の耀きも悦ばず

心に憂ある者を救ふは

唯實行の愛の力のみ。

惱める者は沈黙の壁の如くに

我と爾らが間に立てり

教へよ、かの哀むべき人々を

いかにわが愛の國に導くべきかを。

(唄ひ終つて一同二三秒の間沈黙のままリイザを凝視してゐる。その強烈な感動は畫家に氣に入らない。)

主人。おい、それはお前が作ったのかい。お前詩を作るのかい。

夫人。ほんとお上手なこと。リイザさん、あなたのお心持はよく分りますわ。

畫家。では失禮だが、リイザさん、僕はこんな詩を知つてゐますよ、あな

たへの御返歌として。

妹。さあどうぞ。

畫家。(朗吟す。)

渦巻く火花の煙の中の如く

我らは人生に寂しく立てり

されど我らは未來の種子と

未來の焔と成らんとするなり。

我らの軍は兄弟を契りて

自由と眞理と美に仕へん

さらば盲のもぐらも又

王なる鷲と姿を變へん。

主人。之はうまい。素敵だ。

寡婦。(うつとりして) まあ好いこと。奥さん、私あなたのお心持よく分り

ましてよ。よく分りましたよ。(涙を落とす)

夫人。しつかりなさいまし。そんな泣かないで。

妹。(悲げに) 皆さんはさうして面白さうにしてゐらつしやいますがね、私

にはあの多くの美しい思想が夜の闇の中を火花が飛ぶやうに閃めいて、

人の行くべき道も照さずに消えてしまふのが惜しう御座います。本統に

それを考へると悲しう御座にますわ。

寡婦。(主人の手にキスをして) あなた、私お禮を申上げてよ。

主人。(不安な様子) 何をなさるんです、僕の手はよごれてゐますよ。

寡婦。でもしずにはゐられないのですもの。

妹。ボリスさんは何かお氣に召しませんの。

獸醫。なあに、どうも。僕は眞面目に拜聴してゐます。

妹。私の申した事は間違つておりませうか。

獸醫。眞理はあなたにありますよ。

妹。本統にさうですか。

寡婦。(夫人に)奥様、私失禮致しますわ。(居間に退く。夫人従ふ。)

獸醫。それから美といふものなら、こつちの先生にありますね。

畫家。眞理と美ならどつちがよからうね。

獸醫。さうさね。美の方が好いな。けれど眞理の方が人間には必要だよ。

妹。でもあなたにはどつちの方が必要で御座いますの。

獸醫。さやうさ。僕には分りませんね。僕はきつとお關ひなしにあれも結構

構これも結構の方でせう、唯程度がありますがね。

夫人。(登場)あなた、メラニイさんが何か申上げる事があると仰つてですよ。

主人。あの人は何だつておれの手をキスなんぞするんだらう。氣持の悪いつてありやしない。

夫人。(笑ひ乍ら)まあ我慢なさいよ。

主人。(去らんとして)あの人の唇はばかに脂つこいんだ。どういふ積だらう。(室内をあちこち歩む。テラアスの一隅から錠前屋の妻のすすり泣きが聞える。)

錠前屋の妻。悪黨め。嘘をつきやつて。

妹。(戦慄して) どうしたのでせう。

妻。(走り出して) そんな事で當るもんかい。

錠前屋。(手に木片を持ち) 待て、待て。

妹。飛んでもない、あのおかみさんをかくまつてやりませう。

妻。(テラスの上に入り出で) みなさん、あいつが私を殺します。

夫人。こつちへお出で。早く、早く。

妻。(錠前屋に) へへ、捉まるもんか。(夫人と居間へ)

獣醫。又この酔っぱらひが。(妹に) あなたは向ふへ行らつしやい、さあさあ

妹。まああなた、あの人をお止めなさいよ。

トロシン。(隅から現れて) 氣を付けろ氣を付けろ、

獣醫。(錠前屋に) 向ふへ行け。

畫家。追ひ出してしまひ給へ。

主人。(居間から飛び出る。後に寡婦) エゴル、またか。

錠前屋。(獣醫に) 何だ貴様なんぞ。おれのかかあをよこせ。

主人。お前氣でも違つたな。

トロシン。かかあは亭主のもんだ。文句はない。

錠前屋。隠すなんてよして下さえ、どうせ見付ける迄だ。

門番。(眠くて堪らないといふ顔で登場。錠前屋の後から) やい、じたばた

やるない。

獣醫。こつちへ来てやつてみてくれ。

妹。手に木を持つておますよ。

獣醫。そんな事はどうでも好いから、あなたはあつちへ行らつしやい。

主人。リイザは向ふへお出でよ。

錠前屋。おれのかかあを出して下さえ、お前さんは何です、何がお前さんに関係があるんだ。

寡婦。門番さん、おまはりさんをお前さんで来て下さい。

門番。エゴルめ、巡査を呼んでくるぞ。

錠前屋。皆さん、一つ聞いて下さえ、手前の處へお客さんが一人お出で遊ばしました。

トロシン。違ひない。

錠前屋。學問のあるお方です。物の分つたお方なんだ。

トロシン。さうだ、さうだ。

錠前屋。ところが内のかかめそのお方の口の上へ濡れ雑巾を持つてゆきや

がつたのです。

トロシン。その通りだ。だが口の上ちやあるまい、顔の上だ。

主人。おいおい、忘れちやいけないよ、お前さんは人間だ。

錠前屋。かかあを出して下さえ。

畫家。とんだ漫畫だ。

寡婦。門番さん、巡査を呼んで来て下さいよ。捉へてぎゆつと抑へておしまひなさいよ。

門番。やいやい、おれは今行つてお前を何だぞ……。

錠前屋。(テラアスに行き)へえ、よう御座いやす、手前のいふ事を聞いてくれなきや、そんなら。

妹。早くお逃げなさいまし。あれ来ましたわ。ぶち殺されますよ。

獸醫。(錠前屋に向ひ、齒の間から)そんならぶつてみる。

主人。おいリイザ、早くお出で。(優しい力で妹を居間へ連れてゆく。寡婦従ふ。)

錠前屋。(獸醫に。)お前さんも逃げなせえ。(持つてゐる木を見構へる。)

獸醫。(錠前屋の目を見つめて)何だと。

錠前屋。ぶつぞ。

獸醫。(小聲で錠前屋に)嘘だらう。

錠前屋。吠えるのはよしなせえよ。

獸醫。何をぐずぐずしてるんだ。ぶつならぶて。

錠前屋。(持つてゐる木を地に投げ捨て)お前さんからぶて。

トロシン。(膝を曲げて禮をして)退却だ、退却だ。

錠前屋。(退場)悪魔め。

獸醫。(嘲笑して)畜生。

トロシン。(畫家に)旦那あんまり内の埒場をいぢめちやいけませんぜ。

畫家。さつさと行つてくれ給へ。

獸醫。(テラアスを下り錠前屋の方へ突き進み)行け、行け、さつさと行かないか。女達さへ居なけれや一人とも只ちや置かない所なんだ。

トロシン。(錠前屋の後に退場)逃げるが勝さ。簡單明瞭なものさ。(隅に隠れる。)

獸醫。(再びテラアスに現れる)まるで獸だ。

畫家。それはさうと、君は實に變な面してゐたぜ。惚れられる事請合の顔だつたよ。君の顔を見てゐると實に面白かつた變つた表情だつたよ。

主人。(登場)かみさん、逃がしてやつたかね。

妹。(急いで現れ、獣醫に)あなたおぶたれになつて。お體に觸りやしませんでして。

獣醫。さう簡單にはゆきません。(夫人、寡婦登場)

主人。ばかめ、何たる事だ、おれはもうあんな奴には仕事を頼まん。まだ手まで顛へてゐる。ヘレナ、ほらごらん。

畫家。あいつめ人ひとり位は殺し兼ねない所でしたね。

獣醫。(笑ひ乍ら)して見ると君、このころつきも矢張り太陽の子かね。

妹。(突然暗示されたやうに)兄さん、あなたは嘘を仰いましたね。みんな嘘です。世の中は悪者だらけです。なぜあなた方はそんな未來の悦びだなんて事を仰るの。なぜあなた方は御自分ばかりでなく他人迄罵かすの

で御座います。人間はあなた方から遠く離れた處にゐるのですよ。あなた方は寂しい小さい不幸な人ばかりですね。一體皆さんは人生の恐れをちつとも感じにならないんですか。敵に取圍まれてゐる事がお見えにならないんですか。どこもかも悪者だらけですわ。私どもはこの慘酷をどうしても世の中から逐ひ出してしまはなければいけません。憎みの心に打勝つのです。私の心がお分りになつて、お分りになつて。(ヒステリック風の發作に陥る。

(幕)

三 幕 目

舞臺序幕と同じ。憂鬱なる日。

夫人。(壁際の安樂椅子に腰かけてゐる)そんなに氣をいら／＼させるのはおよしなさいよ。

妹。(昂奮して室内をあちこちと歩む。)私の體は病氣でも、考へは健全なんですよ。

夫人。誰もさうぢやないとも何とも言やしないぢやありませんか。

妹。私はよく知つてゐますよ。私の言ふ事は色も素氣もない苦い言葉ばかりなんです。あなた方にはそれが聞き辛いのでせう。あなた方は人生の悲しい眞理を感じやうとする氣があまりにならないんでせう。

夫人。それはちつと誇張ですな。

妹。誇張ではありませんよ。姉さんもちつと御自分と臺所の女中との間にある深い淵を考へて御覽なさい。

夫人。私が泣き乍らその淵の傍に立つて恐ろしさに震へてゐたら、そんな深い淵なんぞ消えてしまふでせう。

妹。姉さんはそれだから周圍の人達があなたを理解しなくつても、じつとして暮してゆけるのですな。私にはそんな事出来ませんわ。自分を理解してくれない者は怖いと思ひますわ。私を病氣にしたのもやつぱりそれなのよ。姉さん、どうしても犠牲に成る人が必要なのですな。分つて、私の考へてゐる事が。誰でも自分自身が犠牲にならなくては。

夫人。え、自由に、悦んで、それから無邪氣な感激の心で。けれども強制

してそんな風にするのは、それは人間らしくありませんよ。

乳母。(食堂から)奥様。

妹。(不機嫌さうに)また何なの。

乳母。別にお嬢様への御用では御座いませぬ家主の旦那が参りましたが。

妹。ああ、待たしてお置きなさいよ。(乳母退場)では私の申す事は間違つてゐるでせうか。

夫人。間違つてゐるとは言やしませんわ。

妹。姉様は私達がみんな孤立してゐるやうにお感じにはならなくて。

夫人。いいえ、別にさうとは。

妹。私なんぞとお話なさるのはお厭なんぞでせう。私はどなたからも厭がられます。本統に世の中の人といふ者は何にも恐ろしい亂暴な事が世間

にはないやうに、楽しんで暮さうと思つてゐますのね。

夫人。でも他人を無理に自分の心持と同じやうにさせなくても好いでせう

妹。あなただつて矢張りこの生活は厭だとお思ひなんでせう。それを見識

ぶつて白状なさらない迄よ。私にはちやんとあなたと兄様との間が見えておりますよ。

夫人。もうそんな話は止して頂戴。

妹。(嬉しさうに)そら、好い氣持はしないんでせう。

夫人。まあとんでもない、でもそんな話をするに氣がくさくさするからよ。

妹。でも姉様はもつと苦まなくては。さうすればあなたもお目が覺めてよ。

姉様、あなたは寂しいのよ。本統に不仕合なのだわ。

夫人。リイザさん、あなたそんな嬉しさうな顔をおしだけれど、それは本

統に嬉しいのではないでせう。全體あなたの考へはどうなの。

妹。まあ私の考へ。(間。驚愕の様子)私には分らない、どうしても分らない。私は生きたいのよ、生きたいのよ。でもそれが分らなくてどうしても出来ないの。きつと私には私の好きなやうにして生きてゆく権利がないのだわ。私と同じ心の人が、同じ心の人が欲しいわ。もうこんな心配なんぞ取つて捨ててしまひたくて。でも私には一人もそんな人がありませんわ。

夫人。(妹の手を握り)リイザさん、でもあの獣醫の方が。

妹。まあどうして私がそんな。私は病氣なのよ。ねえさうでせう。あなた方は皆そんな事を仰るけれど。もう澤山、そんな事は。私そんな事伺つてはゐられませんわ。失禮してよ。(急いで退場)

夫人。(深い嘆息をする。両手を頭の上で組み合わせ、室内をあちこち歩み、

主人の肖像の前に立ち止り、それを眺めて唇を噛みしめ、両手を落とす。

小聲で) さやうなら。

乳母。(登場) もう家主さんに來て貰ひましても宜しう御座いますか。

夫人。えええ。

乳母。(退場) 旦那さん、お入り。

家主。どうも今頃上りまして。

夫人。(頷いて) 何か御用でしたか。

家主。(まごまごして笑ひ乍ら) 御主人に實は。

夫人。宅は唯今手を離されませんので。

家主。成程、然しどうもあなた様では。

夫人。どうぞ私に仰つて下さい。私がお取計ひませう。

家主。いや、そのお話と申しますのが感心致しません事で。

夫人。何ですの。それは。

家主。しますれば。いや何どなたでも宜しう御座います。實は警察の方からあの臭い匂に就きまして、それから又ごみ溜其他の位置に就きまして。

夫人。(眉をよせて)それで主人がどうすればよろしいのです。

家主。いえ、決して何も皆様がお悪いのでは御座いません。手前共の不調法で御座います。然し警察の方からコレラの爲にあの匂は止めて貰ひたいと申して参りましたんで。全體警察なんぞには悪い匂を出すものは分折上悪臭を持つてゐるといふ譯など、分るものでは御座いません。そして三百ルーブル以下の罰金だと申して脅すので御座いましたな。

夫人。(反抗の心で)然しあなたの仰る事は全體何のお話なんですよ。

家主。そこで御相談に上つたんですが。何ぞあの悪い臭を消しますやうな化學上の薬でも御座いませんかあ。

夫人。(激して)まああなたといふ人は。(自分を抑へて)まあともかく、

主人に申しておきませう。では失禮を。

家主。すぐにもお傳へ願へますか。

夫人。(退場)御返事をさせますよ。

家主。(夫人の後について)いろいろ御面倒ばかりで。(間)どうだいあの高慢ちきな。待つてゐろ、いつか貴様の尻つぽをちよんぎつてやるぞ。(退場)

主人。(夫人と共に垂帷の中から現る)いやまだある。すまないが一寸錠前

屋へ使をやつてくれ。

夫人。あれ、又で御座いますか。

主人。とてもあいつがゐないと來ては、何にも出來やしない。仕事は達者だし、萬事すぐのみ込んでくれる。いつかあいつが鎔解鍋を拵へてくれたが、實に巧いものだつたよ。すばらしい出來だつた。今日はばかにどんよりした日だなあ。お前今日はモデルに成つたかね。

夫人。いいえ、あの少々申上げたい事があるのですが。

主人。どうぞ今は勘辨しておくれ。頼む。夕方迄はな。夕方には手が空くからな。お前退屈なのかい。書家の先生はどうした。

夫人。あの人はきつと他に爲さる事があるのでせう、私なんぞと話をするよりも。

主人。(何やら分らずに)成程ね。きつとそんな處だらう。一體この頃お前の顔を見るとね、おれにはかう思へるよ、お前の顔には何だか新しいものが浮んでゐる、何だか意味の深いものが籠つてゐるやうだ。

夫人。まあさうですか。

主人。いや本統だよ。では今は御免蒙るよ。(居間へ退く)

女中。(登場)奥様、お願い、御座いますが。私お暇が頂けませうか。

夫人。今日すぐにかい。では家の事は誰がします。

女中。私もうお暇が頂きたう御座います。お給金を頂戴したう御座います。

夫人。その事かい。えええ、承知しました。では一寸その前にお前に頼まれてもらひたいがね、あの錠前屋を呼んで來ておくれな。

女中。(物を案ずるらしく)私あの錠前屋の所へ参る事は御免蒙ります。
夫人。どうして又。

女中。でも私参りません。

夫人。ではあやをお呼び。

女中。ばあやさんは一寸歩いてくるといつて墓地の方へ出かけましたわ。

夫人。ばあやが戻つたらお前行つてもいいよ。それなら門番を呼んでおくれ。これならお出来かい。

女中。はいはい。それでは今日の分のお給金も頂戴いたしますよ。(退場)

夫人。いいとも。

獸醫。(テラスの扉から登場)あなたのお内ではなぜ戸を開けつばなしなんです。いや今日は。

夫人。(握手して)さあそれは。今日は奉公人達本統にぼんやりしてゐますのよ。

獸醫。女中連コレラにびくびくしてゐるのでせう。

夫人。ではコレラが擴がつたと仰るのですか。

獸醫。さあぼつぼつね。リイザさんはお内ですか。

夫人。お部屋ですわ。

獸醫。どんな具合ですわ。

夫人。別にどうと言つて。普段の通りですわ。

獸醫。(心配さうに)悲劇的性質といふのですからな。

夫人。實は失禮では御座いますが、私には何の関係もない事で御座います
がね、少々差出がましく申上げたいのです。私は随分重大なお話だと存

じますが。

獸醫。お話と仰ると。

夫人。リイザの申します處では、あなたが妹に結婚のお話をなさいましたさうですね。

獸醫。(急いで) リイザさんはどんな風にお仰つてでした。

夫人。おやおや、どんな風と申しますと。

獸醫。どんなお顔だつたといふ意味です。歪めてお出ででしたか。それともばかにしてゐると笑つてお出ででしたか。

夫人。(驚いて) どうしてそんな風にお尋ねなさいますの。リイザは大層な悦び方でしたわ。

獸醫。本統ですか。

夫人。ええもうそれは。表にこそ餘り出さないのですが、包み切れないやうに嬉しさうだね。(テラアスから門番登場)

獸醫。そこでこの僕は。ふんばかめ。

門番。お呼び出したかね。

獸醫。誰も呼びはしないよ。僕はつくづく自分が呆れてしまふ。

夫人。私が呼んだのだよ。お前さんあの錠前屋にここへくるやうにさう言つて下さい。

門番。錠前屋でございますか。

夫人。ああ。

門番。唯今すぐで。

夫人。ええ、すぐにね。

門番。畏まりました。(退場。)

獸醫。(嬉しさうに)奥さん、どうぞそのお手を僕に貸して下さい、僕はキスがしたいのです。(キスする)本統にあなたは僕に大な贈物をして下さったのですね。ちつとも期待してゐなかつたのに。それが手に入つたのだ。何だか悲しくなつたり嬉しくなつたりするわい。

夫人。何だか私にはさつぱり分りませんね。

獸醫。ああ、一體どうしたらいいだらう。では本統にリイザさんは僕が結婚を申込んだのが嬉しくてあなたに話したのですか。

夫人。御保證しましてよ。

獸醫。(勝利を感じる如く)その癖僕にはいやだと仰つたのですよ。夫人。(笑ひ乍ら)それはおかしう御座いますね。

獸醫。全くおかしいぢやありませんか。奥さん、僕はかう思つてゐました。リイザさんが僕との結婚を嫌ふのは、僕があの人に反對するからではなくて、御自分の病氣か氣にかかつてゐるからだと思つてゐました。夫人。その通りですわ。

獸醫。さあ之で僕もどうしたら好いか分つたぞ。まづリイザさんの所に馳けてゆく。丸い玉が山をころがつてゆく位に早くゆくのだ。ああ、何といふ仕合な事だらう。奥さん、中々えらい拾ひ物ですよ。

夫人。けれどあなたの襟飾はどうぞ願ひ下げにして頂きたいのね、妹には赤い色が毒ですから。

獸醫。(笑ひ乍ら)僕は少しばかりリイザさんを苛めてやりたかつたものだから、それでわざと之を懸けてゐたのです。今となつてはいつでも好い

や、赤だらうが青だらうが。どれでも同じだ。と言つてネクタイなしでも困るが。(歩き乍ら)本統に有難う御座いました。(錠前屋食堂の入口に現れる、服なぞ皺の儘で)いや、来たな。先生。まあ握手と願ひませう。さうさう。もう仲善くしやうや。君は全體偉いんだが。

夫人。(錠前屋に)今すぐよ、用は。

錠前屋。(沈んだ聲で)奥様、實は。

夫人。どうしたの。

錠前屋。かかあが患ひまして。

夫人。まあ、どこが悪くて。

錠前屋。ひどくどつと來ましたんで。

夫人。(心配の様子)一體いつからのことなの。

錠前屋。今朝方からで。あいつめ大層奥様にお目にかかりたがつておりました。どうぞ奥様をお連れ申してきてくれ、さもなければ死ぬと申しておりましたんで。

夫人。それならなぜ私を案内してくれなかつたの。ああ、お前さんが……

錠前屋。こんな所で亂暴を致しては、私にしても恥しう御座います。

夫人。まあつまらない事を。私行きますよ。

錠前屋。お待ち下さい、一寸心配でございまして。

夫人。何がですよ。

錠前屋。かかあめ多分コレラで御座います。

夫人。何にも怖がるには及ばないぢやありませんか。

錠前屋。(哀願する如く、始ど命令に近く)奥様、どうぞかかあの病氣を直

してやつて下さいまし。

夫人。ではお醫者さんと呼ばなければいけないぢやありませんか、すぐ馬車に乗つて行つておいでよ。

錠前屋。お醫者なんぞ眞平で御座います。私はどんな先生方でも信用致しません。どうぞ奥様に一つ。

主人。(登場) おや、來てゐたね。勇ましい所が。

夫人。あなた、錠前屋のおかみさん病氣ですつて。

主人。そら御覽、お前さんが撲つたからだ。

夫人。おかみさんの病氣はコレラだつてこの人が云ふのですよ。私行つて参りますから、どうぞあなたが。

主人。(心配の様子) お前行つてくるのかい。いやいけない。何だつて又お

前が。

夫人。(驚いて) なぜいけませんの。

主人。もしもコレラだとすると。

錠前屋。(怨むやうに小聲で) なあにくたばる迄の事ですよ。譯のねえ話だ手前共にしたつて人間ですからな。

夫人。お前さんは黙つておいでよ。あなたは又どうしてそんな縁喜でもない事を仰るの。

主人。ヘレナ、お前は又何を考へてゐるのだい。醫者でもない癖に。本統に冗談ぢやない。危険極る。

錠前屋。(怨むやうに) だがもうその邊でくたばりかけてゐるやつは、危険ぢやございませんぜ。

主人。(錠前屋に)何もさうおれにぶつ〜言ふなよ。

夫人。(批難するやうに)あなたはまあ。錠前屋さん、ではお前さんと二人でゆきませう。

主人。それならおれも行く。譯が分らないなあ。(三人食堂へ退く。錠前屋先に立つ。三人の聲聞える。)

夫人。あなた一寸戻つて電話で馬車を言ひ付けて下さいませんか。

主人。醫者に來て貰はなきやいかんよ。お前ぢやだめだ。お前なんぞそこへ行つてどうしやうつていふのだ。(頗る昂奮の様子で立戻り)かういふ時になるとあの先生何を考へてゐるのだらう。ばあやはゐないのか。おれが一緒ではいけないなんてぬかす。女中もゐないのかい。ばあや。おいどこに隠れてゐるんだ。みんな死んだんぢやあるまいな。おいピマヤ。

(女中走り登場)まるで女に惚れられた時のやうな呼び方だな。お前また鏡に見とれてゐたのだらう。

女中。(つんとして)あつとんでもない。私ナイフを磨いておりましたんですよ。

主人。ナイフなんぞどうでも好い。一つ錠前屋の所に行つて來てくれないか。

女中。(きつぱりと)私いやで御座います。

主人。どうしてな。奥さんも行つてゐるぜ。

女中。(無遠慮に)それは御勝手ですとも。

主人。ぢやあ何だつて行くのが厭なんだ。

女中。でもコレラですもの。

主人。(真似て)おやおや、ここでも、コレラですものか。だが奥さんは行つてゐるよ。(ベル鳴る。)

女中。ベルが鳴りましたね。

主人。扉を開けておいで。(女中走り出る。主人それに従ひ)仕様のないひき蛙だ。やれやれ、電話だっけか、面倒臭い。(寡婦登場)

あなたでしたか。どうです、最近の事件といふのを御存知ですかい、宅の方でも邸内にコレラがやつて来たのですよ。面白いぢやありませんか。家内が診察してやるのだつて出かけました。どうです、お氣に召しましたか。

寡婦。あらまあ、あなたのお所もやつぱりね。私の隣りの大佐の家でも昨日コレラにやられましたの。それで奥様お出かけなさいましたの。何の御

用で。

主人。それが僕には分らないのですよ。何の事だかまるで謎だ。

寡婦。よくあなた奥様をお出さなさいましたのね。

主人。いやそれが僕に分らないのです。ああさうだ、電話だ、電話だ。(室内に去り入る。)

女中。(食堂から)御機嫌好う御座います。

寡婦。(冷淡に)おや今日は。

女中。私お願いが御座いますんで。

寡婦。どういふ。

女中。私お嫁に参りたいので御座います。

寡婦。まあさう。

女中。それは大した連れ合なのでしてよ。

寡婦。へえ、どなた、

女中。あなたのお隣りの。

寡婦。(愕いて飛び立つ) 飛んでもない、大佐の方でせう。

女中。(丁寧) に何を仰りますの。あの方は。

寡婦。おや、おやあ、あのおぢいさんが。人をばかにしてること。六十幾つといふ年で、手も足もレウマチで動けないのにね。どうしてお前さんさういふ決心におなりだつたの。然し大層お金があるといふけれど。何だかそんな事聞いてお氣の毒になつてわ。あんな人およしなさいよ、お金が幾らあつたつて。

女中。私もう話を決めまして、何もかも済んでおりますの。

寡婦。それは残念ね。そこで私の御用は。

女中。實は私は親なし兒なので御座いますが、今度嫁に参りますに就て、

あなたに親元に成つて頂きたいので御座います。

寡婦。(指の間から拇指を出して嘲笑の風をする) お前さん奥さんから幾ら

貰つて私の事を何もかもおしやべりしたんだい。

女中。(どきまぎして) 私がで御座いますか。

寡婦。さうですよ。お前さんが。

女中。(驚きを取り直して) 申譯御座いませぬ。でも私あなたがあんな厭な
おぢいさんに躰をお賣りなすつたと考へたものですから。

寡婦。(中てられて) お前さんの通りにね。

女中。ええ、それですからきつとあなたに願ひすれば同じ事をするので、

も、何か好い智慧が貸して頂けると思ひましたんですわ。

寡婦。(無愛想に) お前さんも随分な人ですね。

女中。(靜に、切口上で) さうする方が往來を乞食して歩くよりは餘程好い事は、あなただつてさうお思ひになるでせう。さうする方が好い人が世の中にはありますからぬ。

寡婦。(驚いて小聲で) もう行つて下さい、お金は私が出して上げますからね、さあ行つて下さい、私が出して上げますからね。

女中。それはすみませんこと。ではいつそのお金が頂戴出來ますかしら。

寡婦。まあ行つて下さいよ、今ここには持合がありませんから。

女中。それでは日が暮れましたら、又お邪魔に上ります。どうぞお瞞しになりませんやうに。

寡婦。そんな事があるもんですか。さあ行つて下さい。(女中退場、寡婦、

安樂椅子に躰を投げ出し、涙あふれ出で、苦しいやうに啜り泣く)

主人。(自分の部屋から) まだ奥さんは歸らないのかな。やああなたそこに
お出ででしたか。どうなすつたんです。

寡婦。(膝まづき) あなた、あなた、どうぞあなたの奴隷をお助け下さいまし。

主人。(まごまごして) 何を仰るのですよ。さあ立つた。どうしたのですつて。

寡婦。(兩腕で男の膝を抱き) 私は泥の中へ入つた墮落した躰で御座います。どうぞお手を握らして下さいまし、もうこの世の中にはあなたより
貴いお方はどこにもゐらつしやらないのですから。

主人。(驚いて)どうも僕は。まあそんなズボンなんぞ接吻なさらないで下さい、一體どうしやうと仰るのです。

寡婦。私大變な卑しい事を致しました。私はこの心を汚しました。どうぞ私の心をもとのやうに淨い美しいものにして下さいまし。もうあなたの外に、あなたの外には誰にもお願い出きません。

主人。(女を立たせやうとして)まあさう座り込んで困りますよ。さあ立つ、立つ。まだ座つてゐるのですね。一體どうした話なんです。

寡婦。どうぞ私をあなたのお傍において下さいまし。毎日あなたにお目にかかつたり、お話を伺つたりしたので御座います。私は、貯へも御座います。どうぞそれをみんなあなたに差上げます。それであなたの實驗室とやらを御建て下さいまし、それから何ぞ塔とやらもお建てになつて、

その上に昇つてそこで御勉強下さいまし。私はその下の扉の前に夜も晝も立つて、誰にもあなたのお邪魔は致させません、どうぞ私の持つております邸も土地も何もかもお賣拂ひなすつて、みんなあなたのお手許にお取り下さいまし。

主人。(笑ひ乍ら)成程、それは一個の思想ですな。飛んでもない、どんな實驗室を僕が建てやうといふんです。

寡婦。(うれしさうに)どうぞあなたのお顔が毎日拜見出来るやうに、この私にお傍にお置き下さいましな。私にお言葉を掛けて下さらなくても、それ程迄にして頂かなくとも好いので御座います。唯時々私の顔を御覽なさいまして、一寸お笑ひ下さればそれで結構なので御座います。あなたが犬をお畜ひになつてゐらつしやれば、時々は御覽になつてお笑ひも

なさるし、撫でてもおやりになるので御座いませう。どうぞ私をその犬の代りになすつて下さいまし。

主人。(心配の様子)まあ待つて下さいよ、一體それは何の事です。そんな事しちや大變だ。僕は一寸度膽を抜かれた形ですね。全體どうしてそんなに昂奮してしまつたんです。

寡婦。(その言葉を聞きもせず)私はそれは物の分らない木のきれ端のやうなもので御座います。あなたの御本も何が何やらさつぱり分らないので御座います。あなたあれを私拜見したと思ひまして。

主人。(失望の様子)讀まなかつたんですか、ではあの本をどうなすつたんです。

寡婦。私あの御本をキスばかりしておりましたの。中を覗いてもあなたよ

り他の方にはとても理解の出来ない言葉ばかりなので御座いますもの。それで私御本へキスばかり致しておりました。

主人。(どぎまぎして)成程、それで表紙がしみに成つてゐたのですね。又何だつて本なんぞにキスをなさるんです。やつぱりそれは一種の偶像崇拜ですね。

寡婦。あなた、あなた、私はあなたをお慕ひ申してゐるので御座いますよ。

あなたのお傍は何もかも美しく純潔で明るいので御座いますわ。ほんにあなたは神様のやうな。私はあなたをお慕ひしてゐるので御座いますよ。

主人。(小聲に)失禮ですが、さう仰ると、どういふ意味なんでせう。

寡婦。私は犬ころと同じで御座います。口に出して物を言ふ事が私には出来ません。私は唯黙つてゐる事が出来る丈で御座います。随分長い間私

は黙つておりました。その間に皆が寄つてたかつて私の塊を裸にしてしまひました。

主人。一寸お許しを願ひたいだが、僕にはあなたの根底のお考が分りませぬね。こんな事はなに家内とお話し下さる方が、きつと分りが早いかも知れませぬ。

寡婦。私はもう奥様ともお話致しましたの。奥様はほんとに物の分つたお方ですわ。奥様はあなたが御自分を愛してゐらつしやらない事を御存知ですのよ。

主人。(飛び上り)何ですつて。愛してゐないのですつて。

寡婦。奥様は何から何までお分りになつてゐらつしやいますよ。本統にお豪いお方ですわ。けれど一時に二の火が燃え上るには及びませぬでせう。

主人。(更に混乱の様子)何が何やら丸でめちやめちやだ。僕はこんな手の附けられない様な話に今迄一度だつて出會つた事はありませんよ。

寡婦。あなたさへ私のものに成つて下すつたら、私どんな風にでもして上げましてよ。

主人。(稍腹を立てた様子)何ですか。私のものと仰るとどういふ意味です。

(女を見る。小聲で、驚くやうに)メラニイさん。お互にはつきり申す事にしませう。失禮ですがあなたに突込んでお尋ねしますよ。あなた僕にラヴしておゐでぢやないんですか。

寡婦。(數分の間黙つて主人を眺める。やがて沈鬱な聲で)その事でなくつて何を私が申上げてゐたんで御座いませう。あなた、私はそれを申上げてゐたんで御座いますよ。

主人。いや失禮だが、僕の考へでは、僕の考へでは、まさかそんな。

寡婦。(小聲で) 私はもう気が違ひさうですわ。

主人。(激しく室内をあちこち歩み)ともかく心からお禮を申上げるとしませう。僕は非常に有難く思つております。然し残念な事に僕には家内がありますからな。いや、さう言つては良くなかつた。まあともかくさう急に決めてしまふべき話ではないでせう。だがこんな事はどうぞ家内にはお聞かせ下さらないやうに願ひしますよ。僕等二人丈で分る話なんですからな。

寡婦。でも奥様はもう御存知なんですわ。

主人。(殆ど絶望の様子) おや、家内が知つてゐますつて。

獣醫。(主人の妹と二人で階梯を下りて来て、部屋を黙つて通りテラスの

方へゆく。獣醫は元氣無し、但落付いてゐる。主人の妹は大層昂奮の様子)

寡婦。(小聲で) どなたがお出ですこと。どうぞお小さい聲で。あら、兄ですわ。

主人。(妹に) おや、出かけるのかい。

獣醫。(沈んだ調子) お伴を致します。(間)

主人。(率直に、單純に) メラニイさん、とにかく之は厄介なお話ですよ。一寸不可能だと思ひますね。きつとあなたには僕が滑稽に見えるかも知れません。あたのお心を苦めるのもそれなのです。然しメラニイさん、我ながら不思議なんですがね、僕は全然何の慾もないのですからね。寡婦。ではあなた何にもお入用ないのですか。

主人。いや、さう言ふのぢやないんですが。一寸御覽下さいよ、僕は家内に會はなけれやいけないのですから、一寸出かけて参ります。まだあすここに居るに違ひありません。どうも氣に成る。少し言つてやらなくては。おこつてはいけませんよ。(自分の部屋に退場)

寡婦。(靜にその後に従ふ。やがて戻り來り全く混亂の様子で恥づかしげに下を向き、獨言のやうに) やつぱりだめだわ、感じなくて。あゝ恥づかしい。(主人テラスの扉から登場。言葉を續けて) 奥様どうぞこのばかりを同情して下さいまし。

夫人。まあどうなすつたの。ではあなた宅にあの事を仰つたの。

寡婦。私すつかりお打明けしましたの。

夫人。それで宅は何と申しまして。

寡婦。有りたけの私の言葉も、有りためのこの胸の思ひも、みんな水の中へ埃が落ちたやうに……。

夫人。(率直に) お氣の毒ね。それで宅は何と申しまして。

寡婦。どう仰つたか覺えてはおりませんわ。だつてどうしてももうだめですもの。あの方のお心を動かすものは何にも無いのよ。あの火はちつとも汚れに染まうとはしませんのね。私はあの方の前に膝まづいてお願いしましたけれど、ちつともお分りにならないのですもの。

夫人。だから前に申したでせう、待つてゐらつしやいつて。さきに私があるの人に話して置けば好かつたのですわ。

寡婦。私はあなたがきつとお瞞しになると思つてゐたのですわ。私はあの方に何でもかんでも差上げると申上げましたの、私のこの賣られた汚れ